

東京国立文化財研究所要覧

1985

昭和60年度

は　じ　め　に

昭和60年度は、人事面では大きな異動がなく、比較的安定した時期であったが、研究面や事業面では話題の多い年度であった。

まず研究面からいうと、特別研究3件のうち2件がこの年度に新しくスタートした。元来、当研究所で行っている研究は、大別すると4種に分けられる。その第1は、所員が自ら課題を選択して行なう「一般研究」であり、第2は、多数の所員が一つの課題をめぐって総合的に行なう「特別研究」である。このほかに第3として、文化財の所有者などからの委託を受けて行なう「受託研究」、第4として「科学研究費による研究」がある。かように特別研究は、当研究所の研究の重要な柱であるが、本年度、「壁画・障壁画の実証的研究」と「金属文化財の材質・技法及び保存に関する科学的研究」が開始された。いずれも4か年計画で進められる予定である。

研究に類する調査等でも、重文「荒神谷遺跡出土銅剣」の調査が開始された。これは最近島根県で358本がまとまって出土したことで有名なものであり、息の長い調査・修復事業となろう。

事業面で特に注目したいのは、第9回文化財の保存及び修復に関する研究のための国際研究集会である。今回はそのテーマを「各種文化財に関する専門家の養成」とした。国際機関イクロムのエルダー所長をはじめ、ヨーロッパ及びアジアから発表者を迎え、3日間にわたり討議が行われた。この結果、わが国の養成計画、特に学校教育における文化財関係者養成がいちじるしく立ち遅れていることが明らかとなった。

東京国立文化財研究所長

伊　藤　延　男

目 次

I. 沿革	1
1. 設立の経緯	1
2. 年代別重要事項	1
3. 歴代所長	5
II. 機構・職員・予算	6
1. 機構	6
2. 職員	7
3. 名誉研究員	9
4. 昭和60年度予算	9
5. 昭和60年度科学研究費補助金交付一覧	10
III. 調査研究	12
1. 所長	12
2. 美術部	12
(1) 概要	12
(2) 各論	14
A. 一般研究	14
B. 特別研究	16
C. 科学研究費	16
3. 芸能部	18
(1) 概要	18
(2) 各論	19
A. 一般研究	19
B. 特別研究	21
C. 科学研究費	21
4. 保存科学部	22

(1) 概 要	22
(2) 各 論	23
A. 一般研究	23
B. 特別研究	27
C. 受託研究	28
D. 科学研究費	28
E. そ の 他	29
5. 修復技術部	29
(1) 概 要	29
(2) 各 論	30
A. 一般研究	30
B. 特別研究	34
C. 受託研究	34
D. 科学研究費	36
E. そ の 他	38
6. 情報資料部	38
(1) 概 要	38
(2) 各 論	39
A. 一般研究	39
B. 科学研究費	40
7. 主要研究業績	41
IV. 事 業	55
1. 出 版	55
(1) 美術研究	55
(2) 日本美術年鑑	56
(3) 音盤目録IV	56
(4) 保存科学	56
(5) 国際研究集会プロシーディングス	57

2. 公開学術講座	58
3. 夏期学術講座	59
4. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	60
5. 会 議	62
6. 国際・国内交流	67
(1) 職員の国際交流	67
(2) 海外研究者の来訪	68
(3) 招へい研究員	70
V. 研究施設・設備	72
1. 蔵 書	72
2. 資 料	73
3. 機 器・設 備	74
4. 黒 田 記 念 室	74
5. 閲 覧 室	74
VI. 関係法規	75

I. 沿革

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄付・出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鋳二郎及び東京美術学校校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また、我が国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設備され、東京美術学校校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・岡田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192m²の建物1棟を起工した(本館)。

同 3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また、館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作

沿革

品を陳列した。

同 4 年 5 月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同 5 年 6 月 28 日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同 年 10 月 17 日 美術研究所開所式を挙行了した。

同 7 年 1 月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同 年 4 月 18 日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同 年 5 月 26 日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同 9 年 10 月 18 日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同 10 年 1 月 28 日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同 年 4 月 「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同 年 6 月 1 日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同 12 年 6 月 24 日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同 年 11 月 29 日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同 13 年 2 月 12 日 木造、平屋建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同 19 年 8 月 10 日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同 20 年 5 月 28 日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年 7 ～ 8 月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年 3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年 4月 4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同 年 4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

同22年 5月 1日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた。(保存科学部の前身)。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室(66㎡)に設けた。

同 24年 4月 科学研究費補助金により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年 8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

昭25年 9月15日 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

同26年 1月31日 美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。

同27年 4月 1日 文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

また、文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同 年 7月 1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年 4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫 132㎡を改造のうえ、移転した。

同29年 7月 1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。

同32年 3月22日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

沿 革

同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71m²が竣工した。

同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎(保存科学部実験室)として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663m²の建物1棟が竣工した。

同 年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同 年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工に伴い、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎(延1,950.41m²)の起工式が行われた。

同45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。

同45年4月22日 芸能部は、別館3階に移転した。

同45年5月8日 保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終了した。

同45年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。

同 年11月2日 所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。

(本館は、美術部庁舎となる) したがって研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

同46年4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658m²を東京国立博物館から所管換された。

同48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が

置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

同52年4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

同53年3月20日 本館構内の写真等(木造平家建延面積144m²)を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積565.95m²の建物が竣工した。

同53年4月5日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

同59年6月28日 文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。

3. 歴代所長(昭和5年～昭和60年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6. 28～昭和 6. 11. 24)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6. 11. 25～昭和10. 5. 31)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6. 21)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6. 22～昭和17. 6. 28)
所長事務取扱	田 中 豊 蔵	(昭和17. 6. 29～昭和22. 8. 15)
所 長	田 中 豊 蔵	(昭和22. 8. 16～昭和23. 5. 10)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5. 11～昭和24. 8. 30)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8. 31～昭和27. 3. 31)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28. 10. 31)
所 長	田 中 一 松	(昭和28. 11. 1～昭和40. 3. 31)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1)
所 長	伊 藤 延 男	(昭和53. 4. 1～現 在)

Ⅱ． 機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1. 機 構



2. 職 員

(昭和61年3月30日現在)

所 属	職 名	氏 名	
所 長	所 長	伊 藤 延 男	(日本建築史)
庶 務 課	課 長	笹 山 保 美	
	補 佐	西 山 博 朗	
庶 務 係	係 長	斎 藤 多 賀 子	
	庶 務 主 任	松 本 節 子	
	事 務 補 佐	中 村 有 喜 子	
	"	太 田 真 由 美	
	"	滝 澤 美 佐 子	
	"	小 野 美 智 子	
会 計 係	調 査 員(非)	松 原 昇 登	
	係 長	相 澤 下 祥 子	
	係 員	山 田 恵 美	
	事 務 補 佐	鎌 田 忠 雄	
	"	山 西 木 ヅ キ	
	技 能 補 佐	佐々 田 ヅ キ	
	業 務 補 佐	松 田 ヅ キ	
美 術 部	部 長	柳 澤 孝 之	(仏教絵画史)
第一研究室	室 長	関 口 正 之	(日本仏教絵画史)
	主 任 研 究 官	田 實 榮 子	(染織工芸史)
	"	三 宅 久 雄	(日本彫刻史)
第二研究室	室 長	三 輪 英 夫	(日本近世・近代絵画史)
	研 究 員	佐 藤 道 信	(日本近代絵画史)
	"	山 梨 絵 美 子	(日本近代絵画史)
芸 能 部	部 長	三 隅 治 雄	(民俗芸能)
演劇研究室	室 長	佐 藤 道 子	(寺院芸能)
	調 査 研 究 員(非)	松 本 雅 子	(中世芸能)
音楽舞踊研究室	室 長	蒲 生 郷 昭	(音楽学)
民俗芸能研究室	室 長	羽 田 和 子	(日本演劇)
	主 任 研 究 官	中 村 茂 子	(民俗芸能)
	調 査 研 究 員(非)	仲 井 幸 二 郎	(芸能史)

機構・職員・予算

所 属	職 名	氏 名		
保 存 科 学 部 化学研究室	部 長	江 本 義 理	(分析化学)	
	室 長	馬 淵 久 夫	(同位体化学)	
	主 任 研 究 官	門 倉 武 夫	(無機分析化学)	
	物 理 研 究 室	室 長	見 城 敏 子	(塗料化学)
		主 任 研 究 官	石 川 陸 郎	(光学)
	生 物 研 究 室	”	三 浦 定 俊	(計測工学)
		技能補佐員(非)	富 澤 威	(分析化学)
		室 長	新 井 英 夫	(微生物学)
		調査研究員(非)	森 八 郎	(応用昆虫学)
	修 復 技 術 部 第一修復技術 研究室	部 長	鈴 木 友 也	(日本工芸史)
室 長		中 里 寿 克	(日本工芸史)	
研 究 員		西 浦 忠 輝	(木材材質改良学)	
専 門 職 員		茂 木 曙 彦	(彩色保存技術)	
室 長		増 田 勝 彦	(日本工芸史)	
第二修復技術 研究室		室 長	樋 口 清 治	(高分子化学)
第三修復技術 研究室		研 究 員	青 木 繁 夫	(考古学)
情 報 資 料 部 文献資料研究 室		部 長	宮 次 男	(日本中世絵画史)
		室 長	米 倉 迪 夫	(日本中世絵画史)
		研 究 員	島 尾 新	(日本中世絵画史)
	事務補佐員(非)	竹之内 玲 子		
写 真 資 料 研 究 室	”	保 坂 と き 子		
	室 長	鶴 田 武 良	(中国絵画史)	
	研 究 員	鈴 木 廣 之	(日本近世絵画史)	
	専 門 職 員	橋 本 弘 次	(美術写真)	
	”	市 川 和 正	(“)	
	”	野久保 昌 良	(“)	

昭和60年度における退職者

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶 務 課	事 務 補 佐 員	年 代 直 美	59. 5. 1~60. 5. 31	退 職
	業 務 補 佐 員	松 田 ツ キ	56. 4. 1~61. 3. 31	"
芸 能 部	調査研究員(非)	山 田 智恵子	60. 4. 1~61. 3. 31	"

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
情報資料部	事務補佐員	竹之内 玲 子	54. 4. 1~61. 3.31	退 職
	"	保 坂 と き 子	55. 4. 1~61. 3.31	"

3. 名誉研究員

氏 名	退職時官職名	在 職 期 間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		5. 6.30~27. 8. 1	53.10.18
福 山 敏 男	美 術 部 長	23. 5.11~34. 4.15	"
高 田 修	"	27.12. 1~44. 3.31	"
岩 崎 友 吉	修 復 技 術 部 長	27. 4. 1~49. 5.31	"
登 石 健 三	保 存 科 学 部 長	27.10. 1~50. 4. 1	"
岡 畏三郎	美 術 部 長	20. 5.15~51. 4. 1	"
中 村 傳三郎	美術部第二研究室長	22.10. 1~53. 4. 1	"
関 野 克	所 長	40. 4. 1~53. 4. 1	"
秋 山 光 和	美術部第一研究室長	21.10. 1~42. 2. 1	54.10.18
久 野 健	情 報 資 料 部 長	20. 5.31~57. 4. 1	57.10.18
川 上 涇	美 術 部 長	21. 2.28~57. 4. 1	"
関 千 代	美術部第二研究室長	18.12.15~58. 4. 1	58.10.18
横 道 萬里雄	芸 能 部 長	28. 3.16~51. 4. 1	59.10.18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料 研究室長	17.11. 3~59. 4. 1	"
江 上 綏	情報資料部主任研究 官	38. 5. 1~59. 3.31	"
田 村 悦 子	美術部主任研究官	22. 6.16~60. 3.31	60.10.18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料 研究室長	22. 6.27~60. 3.31	"

4. 昭和60年度予算

()は補正後を表わす。

事 項	千円
人 件 費	282,198
運 営 費	(106,284)
	110,612

機構・職員・予算

事	項	
		千円
事業管理		(33,925)
		35,784
一般研究		(38,600)
		39,992
特別研究		(25,729)
		26,973
壁画・障壁画の科学的研究		1,924
伝統芸能の保存組織のあり方の研究		2,621
金属文化財の材質・技法及び保存に関する科学的研究		3,158
研究用機器整備		18,970
受託研究		(1,592)
		1,592
文化財保存に関する国際交流		(6,438)
		6,571
文化財保存修復に関する研究のための国際研究集会		3,372
招へい研究員		2,857
ローマセンター資料収集提供		342
文部本省		
各所修繕		3,552
一般修繕		452
冷暖房設備修繕		3,100
在外研究員旅費		4,977
文化庁		
文化財保存事業費		1,500
重文荒神谷遺跡出土銅剣の調査		

5. 昭和60年度科学研究費補助金交付一覧

(1) 職員が研究代表者となったもの

種 別	課 題 名	研究代表者	交 付 額
総合研究(A)	考古遺物の埋蔵環境における変質現象に関する研究(3年次計画第1年次)	江 本 義 理	千円 6,000
一般研究(A)	日本美術における中世より近世への様式展開についての 実証的研究(2年次計画第2年次)	関 口 正 之	500

種 別	課 題 名	研究代表者	交 付 額
一般研究(B)	東アジア文化圏からみた沖縄舞踊技法の特質とその舞踊譜化の研究(3年次計画第2年次)	三 隅 治 雄	千円 1,600
"	明治前半期の博覧会、美術展覧会に関する基礎資料の収集と研究(2年次計画第2年次)	三 輪 英 夫	500
試験研究(1)	彩色文化財の劣化と保存に関する実証的研究(3年次計画第2年次)	鈴 木 友 也	2,600
試験研究(2)	美術史学における多角的情報処理システムの開発(2年次計画第1年次)	宮 次 男	14,000
計 6 件			

(2) 職員が研究分担者となったもの

種 別	課 題 名	研究代表者名	研究分担者
総合研究(A)	義太夫節における様式展開の研究	東京芸術大学 井野辺 潔	蒲 生 郷 昭
"	保存図書の酸性化対策に関する研究	東京農工大学 大江礼三郎	増 田 勝 彦 三 浦 定 俊
"	日本工芸基礎資料集成とその技術に関する研究	東京芸術大学 中野政樹	中 里 寿 克 田 實 栄 子

Ⅲ． 調 査 研 究

1. 所 長

(1) 日本建築史の研究

従来よりの継続として行っているものであって、本年度は平安時代末期に重点を置いて資料の蒐集をはかった。

(2) 日本建築技法の研究

本年度も前年度にひきつづき、木造建築構造における接合部の力学的研究を行った。本研究には修復技術部西浦忠輝が参加したほか、東京大学教授杉山英男、同助手安藤直人両氏の協力も願った。

(3) 文化財保護制度史研究

従来よりの継続として史料整理を行った。

2. 美 術 部

(1) 概 要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い、かつその成果を公表することを目的としている。美術部は二室より構成され、古美術は第一研究室が担当し、近代・現代美術は第二研究室の担当である。

研究調査は各時代にわたり絵画・彫刻・工芸の各部門について、作品と文献資料との両面から実証的に進められており、共に基礎となる研究資料の作成と整理とに努めているほか、現代美術の動向に関する調査と資料収集をも平行して行っている。また、作品に関し、早くから実施して来た科学的な鑑識法を積極的に活用しているのも当部の特色である。さらに情報資料部所員とは研究や調査の面で緊密な協力が行われている。昭和59年度からは4か年計画で情報資料部と共同の特別研究「壁画・障壁画の実証的研究」が始まり、調査と関係資料の収集を進めた。また、科学研究費補助金による

共同研究としては「日本美術における中世より近世への様式展開についての実証的研究」(一般研究A)、「明治前半期の博覧会、美術展覧会に関する基礎資料の収集と研究」(一般研究B)とが2年目にあたり、それぞれに成果を収めた。そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお、研究員それぞれの研究課題と内容は(2)研究調査活動の項に示す通りである。

研究調査の結果は、第一研究室全員が編集担当する機関誌「美術研究」(昭和7年創刊)やその他の学会誌に発表し、また、第二研究室が中心とする「日本美術年鑑」(昭和11年創刊)を発行しており、単行の研究報告も随時刊行している。さらにそのほか情報資料部との共同で、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために毎年一回公開学術講座を開催し、また、58年度より若い専門家育成のための夏期学術講座を開催している。そのほか研究成果発表の一環として「庵寺永久寺真言堂伝来真言八祖行状図とその関係資料展」を10月28・29日の両日、情報資料部と共同で開催した。なお、黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所、現美術部は黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、その多くを陳列する黒田記念室は毎週一回木曜日の午後公開している。

第一研究室

日本及び東洋諸地域の古美術について、各研究員が専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め、主要問題を捉えた共同研究を行い、常に精密な基礎資料の収集に努めている。なお、第一研究室の研究員は「美術研究」の編集業務を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と、これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを継続して行っている。また、科学研究費補助金により共同研究として「明治前半期の博覧会、美術展覧会に関する基礎資料の収集と研究」(一般(B) 代表者 三輪英夫第2年度)を行った。とくに現代美術に関する調査研究においては、その年度に収集した資料を整理し、その成果を『日本美術年鑑』として毎年公刊している。本年度は、昭和58年の内容をもった昭和59年版を刊行し、引続いて60年版の編集に着手した。

また、研究事業として昭和52年度以降実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中

調査研究

心となって行われてきたが、本年度は一部作品の修理を行ったため中止した。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 美術基準作品の研究

わが国古代中世の美術工芸品のうち、国宝・重要文化財あるいはそれに準ずる優作で、年記銘を有する作品あるいは作者・流派・様式等を代表するもの等、美術史上の基準的作品について詳細に考察し、併せて文献史料の検討をも加え、美術工芸遺品の体系づけに役立てる。

(1) 仏教絵画の調査研究

基準作として有名な教王護国寺蔵五大尊(5幅)及び同寺旧蔵京都国立博物館蔵十二天(12幅)について、それぞれ継続的な調査を実施した。(柳澤・関口)

(2) 日本仏教彫刻史研究

仏師快慶及び快慶派仏師の研究を進めた。快慶に関しては和歌山遍照光院阿弥陀如来立像、東大寺公慶堂地藏菩薩立像ほか、いわゆる安阿弥様作例では大阪大心寺阿弥陀如来立像、神奈川教恩寺阿弥陀三尊像などの調査を実施した。(三宅)

(3) 染織品の研究

ア 上代裂の研究

東京国立博物館所蔵の法隆寺裂・正倉院裂の基礎調査を続行している。(田實)

イ 近世初期染織品及び小袖の研究

米沢市の上杉神社蔵上杉謙信所用服飾類の調査・研究、宮城県白石市の片倉家伝来服飾類の調査・研究、和歌山市の紀州東照宮伝来服飾類の調査・研究、日光山輪王寺伝来の胴着三領の調査・研究を昭和59年度に引き続き行った。(田實)

ウ アイヌ染織品の調査・研究

室町時代以降のわが国染織品に関連が多く、また、原始的要素が濃厚に残っているアイヌ染織品について、昭和59年度に引き続き調査・研究を続行した。(田實)

2. 科学的方法による材質と技法の研究

X線透過法、赤外線写真、紫外線蛍光法、双眼実体顕微鏡、赤外線テレビ等を用いた科学的方法により、わが国美術工芸品の材質・技法・構造などを明らかにする。

(1) 古代中世絵画の材質技法に関する研究

ア 真言八祖行状図の調査研究

汚損や補修の著しい行状図8幅について、前年度に引続き科学的方法を援用して調査を実施し、一部の考察を発表した。(柳澤)

イ 鶴林寺太子堂壁画と四天柱絵の調査研究

太子堂は仏後壁表裏並びに四天柱絵が著しく黒化し、図様が判別し難い。それに対し赤外線テレビカメラによる大掛りな共同調査を実施し、成果を収めた。(柳澤)

(2) 仏像彫刻の材質技法に関する研究

東京国立博物館が実施している法隆寺猊納宝物特別総合調査のうち、7線透視撮影等の方法を用いた四十八体仏の材質・鑄造技法などの調査研究に参加した。木彫像では和歌山遍照光院、大阪北十萬、大心寺、長泉寺の各阿弥陀如来像、長崎宝門寺旧蔵降三世明王像などのX線透視撮影及びファイバースコープによる調査を行った。(三宅)

(3) 伝統的染織技術の調査・研究

日本工芸会で昭和53年度から続行している東京国立博物館蔵「白地風景模様茶屋染帷子」の復元は、昨年度下絵が完成し、8年目の今年度は糸目糊置の試みに入ったが、スタッフ一同、十分な成果があがるまでは本番の糊置は出来ないので、糊の試作、糊置と藍の浸染に検討を重ねている。(田實)

3. 美術様式とその伝播の研究

わが国美術工芸に見られる様式の展開と系統を、インド・中国・朝鮮や西洋諸地域など諸外国にその源流を探り、その影響と受容の様相を明らかに位置づけると共に、国内における史的展開を体系化する。一方、日本以外の外国各地の美術に関してもそれぞれ様式的検討を行う。

(1) 現存する中国絵画の包括的再検討と国内国外における補足的調査

東京大学東洋文化研究所戸田禎佑教授を代表とする共同研究に参加し、写真資料による検討を加えた。(柳澤・関口)

(2) パーミヤーン壁画の研究

先年に引継ぎ、成城大学調査隊によるパーミヤーン壁画の共同研究に参加し、報告

調査研究

書作成のための作業を続行した。(柳澤)

4. 作家・流派及び美術団体の研究

著名な作家の伝記と作品，作家の属する流派や美術団体の活動などを網羅的に調査して，実体を明らかにする。

(1) 日本近代美術基礎資料の研究

近代美術に関する未発表の宛書簡研究を継続して行い，林忠正宛書簡の解説及び内容の検討(三輪，情報資料部米倉・鈴木)，黒田清輝宛書簡の解説と関連資料の研究を進めた。(三輪・山梨) また，明治期に刊行された雑誌資料の調査研究を行った。(佐藤・山梨)

(2) 日本近代作家研究

ア 近代洋画家研究

黒田清輝，久米桂一郎，原田直次郎，鹿子木孟郎ほか白馬会，太平洋画会系の作家の画歴及び作品の調査研究を行った。(三輪・山梨)

イ 近代日本画家研究

橋本雅邦，柴田是真，狩野芳崖の作品の調査研究を行った。(佐藤)

(3) 昭和初期美術団体に関する研究

昭和初年から戦前に至る美術団体の資料を調査し，その動向，特性を研究した。(佐藤)

B. 特別研究

「壁画・障壁画の実証的研究」(4か年計画の第2年度)

本研究はわが国古代・中世・近世にわたる社寺建造物等の内部を飾る壁画・障壁画を研究対象とする。これらの中には画面の剥落や褪色等の劣化著しいものが少なくなく，よって科学的な鑑識法による詳細な調査を実施し，それぞれの材質や技法及び様式的特色を明らかにすると共に，文献的考察をも加え，それらの美術史的位置づけを行おうとするものである。本年度は先年来実施してきた赤外線テレビカメラによる鶴林寺太子堂四天柱絵の調査を完了し，顕著な成果を収めた。

C. 科学研究費

1. 「明治前半期の博覧会，美術展覧会に関する基礎資料の収集と研究」(一般研究(B))

研究代表者 三輪英夫, 研究分担者 佐藤道信, 山梨絵美子)

本研究は転換期美術としての特性をもつと考えられる明治前半期美術の動向を体系的かつ正確に把握するために、この時期の内外博覧会、美術展覧会の基礎資料を収集し研究することを目的に、2年度にわたる研究の総括として下記のことを行った。

(1) 第3～5回内国勲業博覧会に関して、前年度作成した全授賞者リストの内絵画部門(第3回249名、4回220名、5回232名)の授賞作で図様の確かめられるものについて、主題、モチーフ、作風の推移について検討した。その結果とくに洋画の場合、①明治初年における西洋画の直接受容の段階から同10年代後半における日本の伝統的図像との融合への関心の段階を経て、②同20年代初頭からのこの時期においては近代日本の自覚に基づく新しい図像の模索と実験という新たな展開を示したところに顕著な特色が認められた。また、日本画、彫刻、工芸においてもほぼ洋画に準じる運動が認められる。

(2) 前年度に継続し基礎資料の収集を行い、内国勲業博覧会の他、昌平坂博物館聖堂書画大展覧(明治7)京都博覧会(同9)奈良博覧会(同8)等の出品目録を整え内容に関する検討を行い、明治美術会展初期出品作家については、現存する当該作品の調査を行い原田直次郎他新出の資料を発見することができ、その成果の一端を発表した。また、共同研究者佐藤道信は米国での鑑画会資料の調査を行った。これらの資料収集にあたっては極力写真撮影を行った。

(3) 日本参加の万国博覧会については、文献調査の段階に止めた。

これらの調査研究により、明治前半期美術の動向を具体的に明らかにする基礎資料を整え得たとともに、この時期に顕著な美術上の特性を、とくに明治20年前後の作例を比較検討することにより明らかにすることができた。

2. 「日本美術における中世より近世への様式展開についての実証的研究」(一般研

究(A) 研究代表者 関口正之, 研究分担者 宮次男, 米倉迪夫, 鈴木廣之, 島尾新, 三宅久雄, 田實榮子, 鶴田武良)

本研究では研究組織を1絵画班、2彫刻班、3工芸班、4中国美術班に分けた。本研究課題における第2年度である本年度は、中世近世美術の基準作例に関する調査、研究資料収集を前年度に続いて実施した。四班のうち絵画班と彫刻班とが作品の現地調査を行うことができた。1絵画班は(1)重要作品調査と(2)画中画資料の収集の二面か

調査研究

ら研究を進め、(1)では高僧伝絵と社寺縁起絵の分野について大分・永福寺蔵遊行上人縁起絵、大分・杵原八幡宮蔵由原八幡宮縁起、大阪・逸翁美術館蔵八幡大菩薩御縁起を調査し、同一主題の表現の比較研究資料を集め、障屏画について神奈川・三溪園所蔵襖絵を調査し、近世における室内装飾の趣向を検討する資料を得ることができた。(2)においては絵巻物に描かれた画中画資料を絵画班全員で検討し様々な角度からの検索に応じられるようにパーソナル・コンピュータを用いた整理分類を行うための作業を前年度に引続き実施した。2 彫刻班は在銘像を中心とした基準作品を検討するため大阪・藤田美術館蔵地藏菩薩像、同大心寺蔵阿弥陀如来像他を調査した。また、古様を見せる長崎・宝円寺旧蔵降三世明王像をファイバー・スコープにより調査し延宝8(1680)年の造像であることをつきとめ、中世から近世への様式展開を考察する上での資料を得た。3 工芸班は前年度に調査した片倉家伝来染織品その他について近世染織品との比較研究と資料整理を行い、4 中国美術班も前年度に調査した大阪・個人蔵、長崎地方所在の舶載中国絵画関係資料を整理し日本の絵画・書蹟に与えた影響を検討した。各研究班とも本研究によって得られた研究資料に基づき「美術研究」誌上にその研究成果の一部を発表した。

3. 「日本工芸基礎・資料集成とその技術に関する研究」(総合研究(A) 研究代表者 東京芸術大学 中野政樹)の研究分担者として参加

昭和59年度に引継ぎ染色品の基礎資料調査を行い、そのまとめにかかった。(田 實)

3. 芸 能 部

(1) 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能に資するために必要な基礎的研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室より構成されている。芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備及び記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。また、研究の結果は刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

芸 能 部

特別研究「伝統芸能の保存組織のあり方の研究」では2年次を迎え、昨年に続いて民俗芸能に関する研究を進めた。また、科学研究費補助金による「東アジア文化圏から見た沖縄舞踊技法の特質とその舞踊譜化の研究」については、インドネシア・マレーシアの舞踊をビデオに撮り、沖縄舞踊との比較分析を行った。

演劇研究室

演劇研究室は、日本古典演劇について芸能学的に調査・研究を行い、また、これら諸芸能の周辺にあって、伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

本年度は個人研究・共同研究ともに「寺院行事の研究」に重点を置き、悔過会^{けいかい}の調査研究及び堅義論義会^{けんぎろんぎかい}の構成に関する分析作業を行った。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について、芸能学的、音楽学的な調査研究を行い、これら伝統芸能の成立に深い関係を持つ周辺分野についても、調査研究を進めている。

本年度は、個人研究として「邦楽用語の研究」「三味線の音楽図像学的研究」「音楽取調掛における俗曲改良の研究」「義太夫節の音楽的研究」を行った。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし、それらの芸能保存・活用に資するために必要な研究を行っている。本年度は個人研究として「民俗芸能における採り物の研究」を行い、共同研究として「民俗芸能の民俗的基盤の研究」「民謡の研究」「能の雛子事の研究」を行った。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる総合的比較研究を行い、その変遷・分化をあとづけることを一貫した目的とする。本

調査研究

年度はこれまでに収集した録音資料をもとに、各宗派における論義会ろんぎかいの構成分析に手を染め、法隆寺の「昭和大修理完成記念法会」の諸行事については実地調査を行った。

また、長期的に継続している悔過会の研究に関しては、醍醐寺所蔵文書の調査・撮影と慈恩寺・若松寺・滝山寺の法会の実地調査を行った。(佐藤・廣瀬)

2. 邦楽用語の研究

邦楽の用語は、分野ごとにまちまちに使われ方をしている。本研究は、それらを総合的に把握・整理して、同語異義、異語同義などの様相を明らかにし、新しい用語体系の確立に資することを目的とする。本年度においても、その一部を達成した。(蒲生)

3. 三味線の音楽図像学的研究

日本の美術作品には、多くの音楽場面が描かれており、それらは、音楽史研究上、重要な史料となり得るものである。本年度は、近世初期風俗画に描かれている三味線を取り上げて、詳細な研究を行った。(蒲生)

4. 音楽取調掛における俗曲改良の研究

明治12年に文部省に設置された音楽取調掛の事業の一つである「俗曲改良」のなかでも、従来ほとんど知られていなかった長唄の改良の経過や成果を、実証的に明らかにした。(蒲生)

5. 義太夫節の音楽的研究

義太夫節における「風(ふう)」の実体を音楽学的に分析、研究した。(山田)

6. 民俗芸能における採り物の研究

ささら(彫・編木)を用いている芸能を調査し、その呪術的性格を明らかにし、楽器であるか採り物であるかなどについて分析、研究した。(中村)

7. 能の囃子事の研究

能の技法の中でも、人物の登退場や舞踊的演技として奏演される各種の囃子事は、その重要性にもかかわらず、従来の能楽研究では正当な扱いを受けていなかった。本研究は、各種の譜本及び奏演の実際から得られたデータをもとに、囃子事の内容や形態を客観的・体系的に記録し、能の技法の解明に資することを目的とする。(蒲生・羽田)

8. 民俗芸能の民俗的基盤の研究

芸能を、その行われる季節・場所・参加者(演者・観客を含む)などの面から取りあ

げる連続した研究の一環として、「道中の芸能」に関する調査研究を行った。(三隅・仲井)

9. 民俗芸能伝承方法の研究

各種民俗芸能の伝承方法について資料の収集・分析を行った。(三隅・中村)

10. 民謡の研究

日本の民謡の研究において、民謡の芸術的要素を無視してはその全き姿をとらえることができないという観点より、上代から近世に至る日本の民謡伝承の上に占める芸術の位置を究明する目的をもって、前年度に引き続き近世歌謡の分析を行い、あわせて童歌の、特に遊戯歌の芸術的要素についての調査研究を行った。(三隅・仲井・中村)

B. 特別研究

「伝統芸能の保存組織のあり方の研究」(4か年計画の第2年次)

人から人への技芸の伝達によって保存が可能になる伝統芸能にあっては、その伝達を正確、かつ強固に行わしめる保存伝承組織の確立が望まれる。そのため、過去の伝承組織の諸相を考察し、また、現に各地にある保存会・養成会・愛好会等の実態を精査し、それらの分析を通して、伝統芸能の、文化財としてのより完璧な保存組織のあり方を研究する。昨年に続き、民俗芸能を対象として各地の組織の現状調査を行った。

C. 科学研究費

1. 「東アジア文化圏からみた沖縄舞踊技法の特質とその舞踊譜化の研究」

(一般研究(B) 研究代表者 三隅治雄 研究分担者 宜保栄治郎)

わが国の伝統芸能の一翼を占める沖縄の舞踊は、その歴史的、地理的状況から、周辺の中国大陸・東南アジア・太平洋諸島群との交流を深めて、独特の様式・技法を確立するに至った。本研究ではそうした沖縄舞踊の技法を、周辺諸国の舞踊と比較しながら分析を行い、その汎アジア的特質を解明するとともに、その技法の舞踊譜化を実現させようとするものであるが、本年度においては、沖縄の古典舞踊の技法を、沖縄在住の多数の伝承者を流派別に選んでビデオ撮影した。また、インドネシア・マレーシアの各民族舞踊のビデオ撮影も行い、沖縄のそれとの比較分析を行った。

2. 「義太夫節における様式展開の研究」(総合研究(A) 研究代表者 大阪音楽大学

調査研究

教授 井野辺潔)

前年度に引続き研究分担者として参加，豊竹筑前少掾，豊竹比太夫，竹本住太夫，竹本組太夫，豊竹鐘太夫の「風」の実体の考察を担当し，また，多数の五線譜採譜を行った。(蒲生・山田)

5. 保存科学部

(1) 概要

文化財の材質・構造に関する科学的研究，並びに文化財のおかれている保存環境の自然科学的研究を行い，これらを基礎として文化財の保存に関する技術的研究を行っている。研究成果は文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。また，文化財の産地推定の研究も手掛けている。

研究組織は，化学研究室，物理研究室，生物研究室の3室から成っている。調査研究の結果は，修復技術部と共同の機関誌「保存科学」により公表される。

受託研究は修復技術部と共同の「国宝，重文，日光社寺建造物に関する研究」を行った。

科学研究費「彩色文化財の劣化と保存に関する実証的研究」(試験研究(1))は，修復技術部と共同で各担当者が分担課題について調査研究を行った。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む)，並びにその結果の公表を職務としている。

内容としては，微量分析，非破壊分析，同位体分析によって，主として無機物質の材質とその劣化に関する研究，原料産地に関する研究を行っている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表を職務としている。具体的には，文化財の材質・構造を知るため， γ 線・X線・紫外線・赤外線などを用いた非接触的な手法を開発し応用する研究を行っている。

また、展示・収蔵・梱包輸送などの保存環境に関し、温湿度・照明・アルカリ汚染因子などが文化財に及ぼす劣化現象を把握し、劣化防止並びにその応用に関する研究を行っている。

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究とその公表を職務としている。文化財の生物(微生物、昆虫等)による被害の実態調査、生物劣化要因並びに劣化機構の調査研究、加害生物防除法の研究並びに開発を行い、これを実施している。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 文化財の材質、構造に関する研究

(1) X線分析

ア 蛍光X線分析

青銅器、建築彩色、腐食生成物等について、試料を採取できないものに対しては非破壊的方法により、X線回折分析を併用し材質を分析して、技法との関連を調査した。

重文・荒神谷遺跡出土銅剣の本体、鍔を非破壊的に分析し、素地の成分、鍔の鉱物組成を調査した。(江本)

イ 可搬式X線回折装置による非破壊的材質調査法の検討

- a. 試料を採取、粉末化せずに直接試料面の測定を行う場合、標準カードからデータを検索することが難しい場合がある。そのため顔料の標準X線回折チャートを作成している。本年度は20種の国産顔料を測定した。
- b. 顔料、鍔の基礎的データの集積及び絵画、彫刻等の非破壊的検査法について検討した。本年度は古海遺跡(群馬県)、樋渡遺跡(福岡県)、シリヤ遺跡(現東博蔵)、草戸千軒遺跡(岡山県)などから出土した鉄釘、銅剣、飾り金具等の腐食生成物について調査した。
- c. その他絵画表面の結晶性生成物について非破壊的方法により同定を行った。(門倉)

調査研究

(2) 鉛同位体分析

昨年度に引き続き、350点の資料を測定した。この中には九州地方出土の弥生時代から平安時代に至るまでの青銅器200点が含まれている。これによって従来から明らかになりつつあった青銅原料、産地の時代による変遷の状態が一層明らかになった。(馬淵)

(3) X線・ガンマ線撮影

ア 法隆寺献納宝物特別調査 一東京国立博物館一

四十八体仏のガンマ線透視撮影による構造調査を行った。今年度で撮影は完了し、撮影のデータを含めた調査結果が〔法隆寺献納宝物特別調査報告書VI〕(昭60.3)として発行された。(三浦・石川)

イ 東京国立博物館所蔵品のX線撮影

東京国立博物館の依頼により、所蔵品のうち古墳出土遺物のX線撮影を行った。その調査結果は図版目録〔古墳遺物篇(関東Ⅲ)(昭61.3)〕に収められた。(三浦)

ウ ガンマ線撮影法の定量化

金銅仏などの青銅製品を透視撮影するときに、組成の分った青銅クサビと一緒に写し込みエックス線吸収係数を求め組成分析の参考とする方法で、四十八体仏の内の観音菩薩立像(168号)について調査した。(第4次特別調査会で発表)(三浦)

エ エミッショングラフィ

高エネルギーのエックス線によって発生する顔料からの二次電子線を用いて絵画の撮影をする方法を検討した。用いるフィルムと金属フィルターについて実験し片面乳剤のフィルムで、厚さ3mmの錫板フィルターを用いることが最適であることを明らかにした。(三浦)

(4) 電子顕微鏡による古代漆工技法の研究

製作年代の明らかな漆芸品の試片を用いて電子顕微鏡による下地漆の製作技法の解明について検討した。(見城)

(5) 膠の同定

膠の主成分である蛋白質のアミノ酸中のヒドロキシプロリンに注目し、ウサギ、

考古試料の材質、製作技法等を解明する際、誤った判定を行わないよう試料の埋蔵絵中の膠の検出法を検討した。(見城)

2. 文化財の保存及び環境等に関する研究

主として展示室、収蔵庫内の温湿度、照明等の測定、新設施設の屋内汚染因子の除去、シーズニングの検討を行い、展示、保存環境としての適否に関しモニター等を用いた調査を、本年度は次のとおり実施している。

(1) 施設内の環境調査

- 石巻文化センター(宮城県)(見城)
- 仙台市立博物館(宮城県)(見城)
- 岩手県立博物館(岩手県)(石川)
- 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館(栃木県)(見城)
- 群馬県立歴史博物館(群馬県)(石川)
- 東毛歴史資料館(群馬県)(見城)
- 練馬区立美術館(東京都)(石川)
- 世田谷美術館(東京都)(見城)
- 岐阜市立歴史博物館(岐阜県)(江本)
- 静岡県立美術館(静岡県)(門倉)
- 和歌山県美術館(和歌山県)(見城)
- 金刀比羅宮博物館(香川県)(見城)
- 鹿児島県立美術館(鹿児島県)(三浦・江本・見城・石川)

(2) 光モニターによる日照調査

338～596nmの波長域で一樣に褪色するローダミンB光モニターと284～441nmの波長域のみ鋭敏に褪色する密陀僧光モニターとを50時間露光して、その前後の色差から褪色を判定する方法で二条城の二の丸御殿、根津美術館、庭園美術館において1年間の日照の影響を調査した。(見城)

(3) 低照度下における高演色性光源に関する研究

現在、全国の展示、収蔵施設で用いられている蛍光灯は、4500Kの褪色防止用のものであるが、200ルクス以下の雰囲気の演色性は良好とはいえない。低照度下で演色性の優れた機種として開発された、3000Kで暖かみのあるFLR40L-EDL-NUにつ

調査研究

いて検討を完成した。(石川)

(4) 屋内汚染の除去

新しく建造された博物館、美術館の室内汚染因子を除去し正常な環境において開館できるように協力した。(見城)

(5) 凍結融解による石の劣化の研究 一北大低温研 福田正巳と共同研究一

昨年度に引き続きアメダスのデータを元に全国の気象を調べた。-4~+4度以上の気温変動のあった冬期中の日数に加えて、最低気温の月平均値が0度以下になる月の総雨量まで考慮し、凍結破壊の起きる危険度を示す全国地図を作成した。(修復技術部の項を参照)(三浦)

3. 文化財の生物劣化とその防除に関する研究

(1) 実態調査と防除対策

文化財に被害を及ぼす生物(微生物、昆虫等)の実態調査を行い、被害の状況に応じた防除対策を検討して助言・指導を行っている。本年度は、下記の調査と防除対策を実施した。(新井・森)

ア 東京都日野市教育委員会の依頼により、同市所在の木造歓喜天の被害調査及び防除対策を実施した。

イ 民俗文化財の生物劣化の実態調査を、埼玉県本庄市、上里町等において実施した。

ウ 岡山県立美術館の依頼により、同館が計画中の燻蒸施設の設計図に検討を加え、問題点を指摘した。

エ 千葉県文化財審議会が実施している文化財取扱上の留意事項作成に参加し、下記の県内所在の文化財を調査した。

庚申塔(宝城院)、絹本着色十六羅漢像図(藏福寺)、紙本着色隠元和尚像等3幅及び隠元・木庵・即非墨蹟(福聚寺)、龍正院本堂及び厨子、木造十一面観音立像(清水寺)、木造薬師如来坐像(長副寺)

(2) 生物劣化と防除法の研究

文化財に発生する生物起因の劣化要因と劣化機構についての研究ならびに文化財の生物劣化防除方法の研究開発を行っている。本年度は、下記の事項について実施した。(新井・森)

ア 紙の褐色斑(foxing)要因糸状菌の分類学的研究を行い、その結果を日本菌学会第29回大会で発表した。

イ foxing の形成にもっとも大きな影響のある各種水分環境と紙の含水量、foxing 要因糸状菌の繁殖との関係を検討した。

ウ 酸性紙を中和する方法として、新聞用紙を供試しジエチル亜鉛法の追試を行った。(新井・森)

エ 絶対好稠性糸状菌研究の一環として、レンズの劣化要因となる糸状菌を分離・同定し、生理的性質を検討した。(新井)

オ 低毒性防虫剤研究の一環として、礬素化合物のゴキブリに対する効力試験を実施した。(森)

カ 礬素化合物は、さらにシロアリのコロニーを半年で不活性化し、1年以内に殺滅することを実験的に証明し、米国昆虫学会太平洋支部国際シンポジウムで発表した。(森)

4. 考古遺物遺跡等に関する考古化学及び保存に関する研究

(1) 考古遺物遺跡等の保存

特別史跡大塚古墳(福岡県)、史跡谷口古墳(佐賀県)の保存整備委員会の委員として参加した。(江本)

(2) 水中遺物の保存に関する研究

開陽丸(北海道、江差町)船体の一部保存に関し、海底に横たわる船体の海虫による被害の防除対策の一つとしてビニールシートで覆ったが、その内部の溶存酸素量等の測定を行い雰囲気の調査を行った。テストピースによる実験を継続中。(江本)

B. 特別研究

金属文化財の材質・技法及び保存に関する科学研究(4か年計画の第1年次)

金属文化財について、保存・修復技術の向上に資するため最新の自然科学的方法により、時代による材質の変遷や環境の変化、製作技法及び耐食性等について、調査研究を行った。

1. プラズマ発光分光分析

本年度機器整備により購入設置されたプラズマ発光分光分析装置(I.C.P)の試験的

調査研究

測定を多種類の金属元素について行い、良好な結果を得た。実際のサンプルについて、10種類程度の微量金属元素を同時に定量することを始めている。

2. 鉛同位体比測定

主として九州地方から出土した銅剣、銅矛、銅才、銅鏃などを測定した。これらは荒神谷遺跡(別項参照)出土遺物との比較のために重要なデータになると思われる。

3. ガンマー線透視撮影

法隆寺48体仏の γ 線による構造・技法に関する調査、SoからCsに変え、透視した結果は巣の状態、嵌め金等が新たに発見されている。12月に金銅仏の撮影を終了した。現在は結果の整理中である。

C. 受託研究

国宝、重文・日光社寺建造物の保存に関する研究

大猷院二天門の黒化現象を究明するために、光学顕微鏡と走査電子顕微鏡を用いて、黒変部分の表面、断層面を観察した。また、黒変部位は溶剤で抽出した成分の赤外吸収スペクトルから、これを木材の樹脂成分と判定した。

昭和60年度で修理工事の完成した東照宮御仮殿において、修理工事中ならびに工事終了後に認められた現象について検討した。

- (1) 透塀を塗装した緑青が、工事中に剝落する現象が認められた。
- (2) 透塀の緑青塗装中に微が発生し、2種の防微剤について検討を加え、10%チモール液塗布を採用した。
- (3) 拝殿向拝の金箔の一部に、すでに剝れの現象が認められた。

D. 科学研究費

1. 「考古遺物の埋蔵環境における変質現象に関する研究」(総合研究(A) 研究代表者 江本義理, 研究協力者 一国雅巳, 池本 勲, 竹田満洲雄, 藤原棋多夫, 門倉武夫, 町田 章)

考古遺物は土中で変質を受けており、変質生成物を含む試料又は変質物(例えば錆)そのものから遺物の材質を推定しなければならない場合がある。それらの試料は変質過程で二次的な沈着物、付着物を含んでいる。

サメ、シカ、三千本などのハイドロキシプロリン含有量を測定し唐油画、日本画、油環境における変質現象を地球化学的にとらえ変質生成物を構成する化学種のキャラクターゼーションを明らかにし、指標となる元素、指標に出来ない元素を選択する。

北海道江差町 開陽丸発掘現場、広島県 草戸千軒遺跡をフィールドとしてヘドロ、土壌、海水、地下水を採取分析した。これらの遺跡のほか、原前古墳(栃木県)、樋渡古墳(福岡県)の金属遺物の腐食生成物と前記の埋蔵環境因子との関連を追及した。

2. 「保存図書の酸性化対策に関する研究」(総合研究(A) 研究代表者 東京農工大学 大江礼三郎)の研究分担者として参加した。(修復技術部を参照)(三浦)

E. その他

1. 高松塚古墳壁画の保存(修復技術部を参照)

2. 重文・荒神谷遺跡出土銅剣の調査

(1) 鉛同位体比

最初のシリーズの33本について測定を終了し、日本産の鉛を含むものは一本もないことを確認した。

(2) 本体(素地)及びサビの組成

蛍光X線及びX線回折分析により、非破壊的に錆た面を主体とする測定を行い、素地の成分組成、錆の鉱物組成を調査している。(修復技術部と共同)

5. 修復技術部

(1) 概要

修復技術部は、文化財の修復に関する科学的調査研究とその公表を主務とする部で、保存科学部が主に文化財の保存にかかわる科学的分析研究をつかさどる部であるのに対し、修復技術部は老化破損した文化財を修理または復元する方法を科学的に調査研究している。

研究対象としては、絵画、書跡、彫刻、工芸品、考古資料、出土遺構及び木造構造物等の組織や細部に描かれた絵や彩色、石造構築物などに及ぶ極めて広範囲の文化財があげられる。

調査研究

研究組織としては、3研究室、6研究員、1専門職員からなっている。

なお、科学研究費として「彩色文化財の劣化と保存に関する実証的研究」を保存科学部と共同で実施し、本年度はその第2年次に当る。

第一修復技術研究室

木材及び漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表を主務とする。

第二修復技術研究室

紙、繊維又は皮革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表を主務とする。

第三修復技術研究室

石、金属、土又はその他の無機材質の文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表を主務とする。

各研究室とも経常的な研究として、有形文化財を構成している材料、構造、製作技法についての研究や、それらを修復するための伝統技術の整理体系と科学的裏付けの資料集積、そして更に科学的な材料、技法の修復への応用と開発のための実証的な研究などを実施しており、とくに材質強化、補強、接合、剝落防止、朽損部充填などについて各種合成樹脂の応用と技法の開発に努めている。

これらの研究過程においては、保存科学部との共同研究が必要な部分もあり、また部内においても、一つの文化財が二つ以上の研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く、それらについては各研究室員による共同作業によって研究が進められている。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 伝統的製作技法及び修復技術の研究

(1) 漆芸品の研究

今日まで出版された漆芸に関する文献を蒐集し、アルファベット順に分類して整理を始めた。また、約千項ほどの専門用語に短い解説を加えて英訳した。(中里)

(2) 装潢技法・和紙製造技術の研究

正倉院蔵屏風は前年度までの調査を基に修復作業に入った。あわせて装潢技法に関する調査も行っている。

和紙の繊維を同定するための基礎調査は、JISによる方法に加えて、繊維側面、断面のSEMなどが加えられるようになり、また、和紙の性格を記述するためのマトリクス表示法について研究を開始した。(増田)

(3) 金工品の研究

日本の金工品史の中で中世の梵鐘は大形作例として重要なものであり、鎌倉時代には関東地域において最も盛んに鑄造された。これらの鑄物師の作風技法に関する研究を行い、あわせて鎌倉時代金工の技術的特性を追ってみた。仙台瑞鳳殿の伊達政宗墓出土遺品にある銅製煙管は、わが国の初期煙管の明確な遺品として貴重なものでかつ特異な形式である。この煙管の当初の技法再現について調査研究した。(鈴木)

2. 彩色文化財の合成樹脂等による保存修復の研究

泥下地木彫彩色像の剝落どめ処置実験をエチレン醋酸ビニール共重合体を用いて行った。この樹脂の50%トルエン溶液は、初期接着性に優れ、溶液タイプとホットメルトタイプの両性能を兼ねることができるので、厚手彩色層の剝離の再接着を能率的にすることができた。胡粉下地の欠落部分はアクリルエマルジョン系の市販品であるリキテックスで充填することを検討した。(樋口)

重要文化財・妙義神社の修理に伴う彩色保存処置について調査した。この剝落どめ処置は技術的に容易でない。特に拝殿内部彫刻彩色は厚い顔料層が剝離している箇所が多く、この間隙に樹脂を注入して接着しなければならない。これは未経験の問題であり今後の研究課題である。(樋口)

重要文化財・旧福岡県公会堂貴賓室の天井の中心飾りの部分に雲を主題とする油絵が描れていたが、現在は白色ペンキで塗りつぶされている。今回の修理ではこのペンキを除去して絵を再現することになり検討した結果、メチレンクロライド系剝離材が有効であることが判った。(樋口)

調査研究

3. 文化財建造物の構造力学的研究

本研究は東京大学農学部木質材料研究室と共同で行っているものである。本年度はぬき接合部の繰り返し変形に対する挙動について実験を行い、繰り返し変形に対しては通常短型クサビの方が長型クサビよりも優れていること、そしてその理由は長型クサビのスベリ現象によるものであることが明らかとなった。また、柄接合部の強度試験も行い、これらの結果と実大軸組全体の水平耐力との関係について解析、考察した。(西浦・伊藤)

4. 石造文化財の保存修復に関する研究

(1) 重要文化財・五輪塔(鎌田家所有, 奈良県当麻)修理に伴う樹脂処置を指導した。これは凝灰岩製で風化が著しいが、シランオリゴマー溶液(商品名SS101)を含浸すると濡れ色で黒くなるためモノマー含浸による撥水処置を行った。亀裂内部や積み重ね部分にはSS101の含浸を行い、亀裂部分や剝離部分の充填接着にはアクリルシリコーンオリゴマー(ゼムラック)と石粉の混合物を用いて補修した。(樋口)

(2) 重要文化財・旧名古屋高等裁判所の修理に伴い、コンクリート及び煉瓦の補修、補強、石材のクリーニング、リグノイド床などの調査を行った。特に4種類のリグノイド床(マグネシアセメント)については、木粉と砂の含有量を稀塩酸溶解法で定量した。(樋口)

(3) 史跡・薬師堂石仏(福島県小高町)の修理調査工事に伴い、過去の樹脂処置の実効性とその後の変化について調査した結果、アクリルエマルジョンの含浸は効果がなかったが、エポキシ樹脂による剝離部の充填接着は充分効果のあることが判った。(樋口)

(4) シラン含浸処置に伴う石材の暗色化について、カラーコンピューターを用いた実験研究を行い、1)シランの含浸量が多い程変色が大いこと、2)変色はほとんど明度の低下(暗色化)であり、彩度、色相の変化は極めて小さいこと、3)暗色は時間の経過(屋外条件)と共に低下し元の色に戻ること、4)色が元に戻ってもシラン含浸処理効果は依然として保持されていることが明らかとなった。(西浦)

(5) 沖縄県那覇市、重文・園比屋武御嶽石門の解体修理にかかわる棟石、懸魚石、鬼瓦石の保存修復処置について調査指導を行った。棟石については大割損部の接着をステンレス棒の柄を入れてエポキシ樹脂接着剤で行い、小割損部は柄を入れずに接着

した。剝離部はSS101にアクリル樹脂(パラロイドB-72)を溶解させたものを注入含浸して固定した。最後に全体にSS101を塗付含浸して表面強化、防水をはかった。懸魚石、鬼瓦石については大亀裂の固定をエポキシ樹脂注入で行い、剝離部はSS101とパラロイドB72の混合溶液を注入含浸して固定した、最後にSS101を全体に塗付含浸した。(西浦)

(6) 大分県犬飼町、史跡・犬飼石仏の保存調査工事にかかわる樹脂処置について調査した。石仏は乾いた状態にあり特に含浸強化を行う必要はないが、表面層の剥れ上がり部の接着固定が必要であり、この部分をまずSS101で固めてからエポキシ樹脂で接着固定する方法で良いと判断した。(西浦)

(7) 三重県津市、重文・専修寺如来堂の屋根替え工事にかかわる当初獅子口瓦の再用の可否と必要な保存、修復処置について調査、指導を行った。劣化は割損、化粧部(菊紋部等)の剝離脱落、クラック、凍害による剝離とそれに伴う脆弱化で、中でも割損が重大であるが、その6～7割は、保存、修復処置により再生、再用が可能であり、処置としては、1)SS101の含浸による強化、防水、2)クラック部へのエポキシ樹脂の注入と銅線縛り補強、4)割損部のエポキシ樹脂による接着と銅線縛り補強、4)脱落部及び欠損部(新瓦)のエポキシ樹脂による接着と銅線縛り補強が必要であると判断した。(西浦)

5. 遺跡・遺構の保存処置の研究

茨城県勝田市、史跡・十五郎穴横穴古墳保存のための実験を指定地外の横穴で行った。保存の上からは埋め戻しが最良だが、公開を目的とし断熱材の発泡体で造った閉閉自在の閉塞石で横穴を塞ぐ方法を考えた。入口周辺の凝灰岩の山肌には発泡ウレタンを吹きつけて覆い、更にその表面及び発泡体の閉塞石の表面を石粉とゼムラックによる擬石で仕上げた。今後定期的に観察、調査する予定である。(樋口・青木)

6. 出土遺物保存処置の研究

金属製品保存処理の際に腐食の原因物質である塩化物を取除く処置を行っているが、満足な結果が得られていない。新しい方法として窒素ガス雰囲気中に常に新鮮な蒸留水を循環させる処理について実験を行い良好な結果を得た。

錆の安定化処理として鉄製品については、アルカリン・サルファイト法を発掘直後の群馬県大泉町、原前古墳出土品に対して、また、銅製品についてはベンゾトリアゾ

調査研究

ール法を東京国立博物館保管、重要文化財・和泉黄金塚出土品一括に対して実施した。

出土木製品については、マニトールを含浸させて凍結乾燥をする方法について基礎実験を進めている。(青木)

7. 虫損文書の修理技術に関する研究

虫損文書を修理するための漉嵌機は、ソビエト型を既に試作していたが所要水量、時間、作業性などに改良を加えるため、新型機開発のための予備実験を行ったところ好結果を得、来年度以降推進するために準備中である。(増田)

B. 特別研究

金属文化財の材質技法及び保存に関する科学研究(4か年計画の第1年次、保存科学部と共同研究)

1. 出土鉄製品については、群馬県大泉町、原前古墳出土品の発掘直後の錆を調査するとともにアルカリン・サルファイト法による錆の安定化処理を試み、また、その他出土銅製品の塩化銅に対するベンゾトリアゾール法による処理安定化技法の探究を行った。

2. 保存科学部の分析調査に対する銅製品のクリーニング及び補修を共同で実施した。

C. 受託研究

1. 筑波山古墳出土鉄製品の錆の安定化処理に関する研究

鉄製品の錆の安定化処理の一方法であるアルカリン・サルファイト法の実施研究を行った。

まず、脱塩を窒素ガス雰囲気中での抽出法で行った後、60℃の0.5N水酸化ナトリウム・0.5N亜硫酸ナトリウム混合水溶液中で錆の安定化処理を行った。

X線撮影の結果、柄頭や鏝などの刀装具に銀象嵌が施されていることが判明し、これらの研ぎ出し処理を行った。また、銀線の鉛同位体比を測定したところ、この銀が中国産であることが判った。

2. 芝居絵巻馬の保存修復処置の研究

剝落止め処置をより完全なものとするために彩色剝離層再接着の前処理として、ク

リーニング処置が有効であることが本研究により確認された。

麻布美術館所蔵の芝居絵は、全面に金箔を押しその上に彩色が施されているが、特に胡粉層部分の剝離が甚しく立て掛けることも出来ない状態であった。クリーニングは、重炭酸アンモン5%水溶液による湿布法で行い彩色層の再接着はバラロイドB72の10%パラキシレン溶液で行った。彩色表面に残った樹脂はメチルエチルケトンを適量含ませた紙で除去した。

3. 福岡市、樋渡遺跡出土銅製品の保存修復研究

遺物は、細形銅剣、青銅製把頭飾、銅鏡各1点であるが全体に錆による損傷が著しかった。

蛍光X線分析によりこれらの材質は青銅であること、また、鉛同位体分析によりこれらはいずれも中国華北地方からの鉱石から作られたことが判った。更に塩化銅の有無をX線回折分析により確認した。把頭飾に付着していた繊維紐は組織同定により大麻であり、また、この紐についていた赤色顔料はX線回折分析により水銀朱であることが判った。

保存処理は、以上の結果を踏まえてベンゾトリアゾール法による錆の安定化処理を実施し損傷した鏡については復原処理をした。

4. 史跡・薬師堂石仏の保存、修復処置に関する研究(福島県小高町)

史跡・薬師堂石仏の保存修理調査工事にかかわる新しい磨崖仏の保存処置方法の研究を行った。これは崖に孔をあけ撥水性シラン樹脂を注入して崖内に撥水層を形成し、磨崖仏への地下水の浸入を防いで凍結劣化、塩類風化、生物劣化を防止すると共に強化処置を容易にせんとするものである。

薬師堂石仏近くの崖面を実験場所として、縦約2.5m、横約1.5mの範囲を設定し赤塗料で線を引いた。そして赤線にそって15~20cm間隔で直径約2cm、長さ約1mの孔をドリルであけた。3週間経過後、孔に撥水性シラン樹脂(SS101)を注入した。都合14回、合計105kgの樹脂を13週に渡って含浸させた。

処理後の実験部位(孔で囲まれた部分)を定期的に観察しているが、昭和61年3月末の時点では周囲の部分に比べて明らかに乾燥状態にある。

充分な観察を行ってから何本かのボーリングコアを採取し、樹脂浸透範囲、即ち、形成された撥水層の広さ、深さ及び撥水力の強さを調査する予定である。(西浦)

調査研究

なお、本受託研究に関連して石仏の内部温度と周辺の外気温度との関係を調べた。その結果、1月下旬から2月下旬にかけて外気温度は $-3\sim -4^{\circ}\text{C}$ に下がり、石仏の内部温度も 0°C 以下となって水が凍結し凍結破壊が起きていることが確認された。(三浦)

D. 科学研究費

1. 「彩色文化財の劣化と保存に関する実証的研究」(試験研究(1) 研究代表者 鈴木友也、研究分担者 江本義理、馬淵久夫、見城敏子、新井英夫、石川陸郎、門倉武夫、三浦定俊、樋口清治、中里寿克、茂木 曙、増田勝彦、青木繁夫、柳沢孝、三宅久雄)

文化財の中で彩色を施しているものは建築部材、障壁画、美術工芸品など数多いが、これら彩色は本質的に褪色や剝落など劣化損傷をうけ易いものである。本研究では彩色の材質技法ならびに劣化状態を実物について調査し、各時代別の技法の特徴、劣化機構を解明し、それぞれの損傷状態に応じた保存処置の確立をめざすもので、昭和59年度より3か年計画で調査研究を行っている。

(1) 斜光照明装置で江戸時代の芝居絵巻馬の修復前後を撮影した結果、顔料層の剝離だけでなく画面の歪みも記録され、同照明装置の効果が確認された。画面の剝離の甚しい部分とテカリのある部分の相互位置関係を考察出来、損傷部分の客観的な記録分布図の作成が可能になった。

(2) 厚さの薄い胡粉及び黄土層を各種の薬剤で剝落どめ処置し、その接着力、処置前後の色差を測定した結果、ふり、PVA、エマルジョンなど水性系のものが、溶剤溶液系のものよりも結果がよいことが確認された。

(3) 丹彩色の場合、膠の濃度が丹に対し2～3(重量%)のとき最も定着性がよいことがウエザーメーターによる劣化試験により確認された。

(4) 青色顔料の岩群青、新岩群青、藍についての耐候試験を行った結果、藍がよいことが判明した。

(5) 漆塗装部の修理再生法として、摺漆と合成樹脂塗付との比較をウエザーメーターによる劣化後の光沢度と耐久性で調べた結果、フッ素樹脂クリヤラッカーが最も優れ、パラロイドB72、摺漆の順となり、シラン(SS101)やゼムラックは漆面が白色化することが判明した。

(6) 重文・妙義神社総門、同浅間神社の建造物彩色に用いられている顔料の材質の組成を蛍光X線、X線回折により明らかにした。また、彩色層のセクションを顕微鏡写真で撮影しその下地技法を解明した。

(7) 三千本、鹿、兎など各膠の中のヒドロキシプロリンに着目し、アミノ酸分析法によりその含有量から膠を同定できる可能性が判ってきた。

(8) 高尾山薬王院蔵、本尊不動明王及び脇侍2軀の泥地彩色の保存処置に関する実験的研究を行った。これらの彩色はいずれも彩色法を若干異にし、また、数回の塗直しが行われている。

例えば、脇侍は当初の漆塗の上に厚い泥地の彩色が塗重ねられているため、広範囲に泥地層が塗漆層から浮き上がっている。接着剤として「アクリラック」と「E40」(エルボックス)を選び実験的に処置した。

(9) 昭和17年、昭和37年に保存処置が行われた霊山寺三重塔、昭和39年にPVAにアクリル樹脂で処置された吉野水分神社本殿、昭和53年に実施した興福寺三重塔の彩色について調査した。

霊山寺三重塔はほぼ異状なく、吉野水分神社もかなり安定していた。興福寺三重塔は接着剤の板への吸込みが良すぎた部分で一部浮き上がりが生じていた。

(10) 5年前合成樹脂による彩色の保存処置を行った岡山県立博物館蔵彩色華鬘のその後の状態を調査し、その処置が有効なことを確認した。

2. 「保存図書の酸性化対象に関する研究」(総合研究(A) 研究代表者 東京農工大学 大江礼三郎)の研究分担者として参加

和紙の礬水による劣化を測定した。日本画家が通常使用している明礬・膠・水の比率で調製した礬水と、その十倍量の明礬で調製した礬水、明礬を硫酸バンドで代用したものを準備し和紙に塗布した。80℃、80%RHの環境で2週間、4週間劣化させ耐折強度の低下速度を比較した。

日本画家が通常用いている明礬濃度の礬水を塗布した和紙の耐折強度低下は、無処理の和紙とあまり差が見られず、一方、通常の十倍量の明礬や硫酸バンドを加えた和紙の劣化は著しく耐折強度が測定不能のものもあった。(増田)

調査研究

E. その他

1. 高松塚古墳壁画の保存

国宝・高松塚古墳壁画の彩色剥落止について、本年度は特に北面の漆喰部と天井の浮上部の合成樹脂による処置を行った。また、修復処置前に微生物学的調査と燻蒸処置を実施した。(保存科学部と共同)

2. 重文・荒神谷遺跡出土銅剣の調査

銅剣調査分析に伴うクリーニング他。(保存科学部を参照)

3. 旧赤坂離宮迎賓館内装飾保存修復に関する調査

旧赤坂離宮迎賓館の保全のための、迎賓館保全調査委員会に伊藤が委員として、又、専門部会建築Ⅱに鈴木が専門委員として協力している。増田が迎賓館内装飾の保守、保存、修復に関する調査を行い、主に天井絵の汚損のクリーニング方法について調査するためテスト区画を設けてクリーニングと補彩を実施した。今後数年間の変化を観察し本格的作業の資料とする。壁張布の保守については今後の検討課題である。(伊藤・鈴木・増田)

6. 情報資料部

(1) 概要

情報資料部は、従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作製、収集、整理、保管、閲覧等の業務を充実発展させ、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術研究所創設以来内外の研究者の利用に供され、文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を計るため、昭和60年度より「美術史学における多角的情報処理システムの開発」(試験研究(2))を中心に電算機を利用した情報処理システムの基礎的研究に着手した。

当部研究員は、上記業務を行うと共に日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っているが、今年度は美術部と共同して特別研究「壁画・障壁画の実証的研究」及び科学研究費補助金による一般研究(A)「日本美術における中世より近世への様式展開について

ての実証的研究」(代表者 関口正之)に参加した。調査研究活動の成果は「美術研究」ほか学会誌、美術部と共催の公開学術講座、夏期学術講座などで発表されている。

当部は、文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録を作成しており、各年分は日本美術年鑑に掲載し一定期間毎に総合・増補し「日本・東洋古美術文献目録」として刊行している。現在、昭和41年～55年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作製、収集、整理、保管、閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し資料の充実につとめた。また、これに平行して美術研究所当時に撮影したガラス製写真原板の転写を昨年度に引き続き実施した。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 美術史関係学術情報処理に関する研究

学術情報の著しい増加と需要の多様化傾向に対応すべく美術史研究資料を中心とした情報処理システムの研究を美術部と協同で行った。

2. 日本古代中世美術の研究

(1) 絵巻物の研究

科学研究費(一般研究(A))に関連して絵巻に見る画中画を調査し、そのデータシートの作製を行った。(全員) 作品研究では昨年にひきつづき八幡縁起の調査を行い、その成果を「美術研究」に発表した。(宮) 高僧伝絵研究の一環として別府永福寺蔵の遊行上人縁起絵一巻を調査の結果、鎌倉時代末期の制作と判定した。(宮) また、拾遺古徳伝絵を中心として法然上人伝絵の研究を進めた。(米倉)

調査研究

(2) 壁画の研究

滋賀県西明寺三重塔壁画の調査を美術部と共同で行った。(宮・島尾)

(3) 中世水墨画の研究

渡宋天神像関係資料の調査研究を継続するとともに、南北朝・室町絵画の画蹟資料の整理・研究をすすめた。(島尾)

3. 近世絵画史の研究

横浜三溪園内の臨春閣・月華殿障壁画の調査を行い、制作時期及び制作事情に関して従來說を覆す新知見を得た。(鈴木)

4. 中国画研究

来舶画人の作品並びに資料の収集と研究を継続するとともに、現代中国絵画の動向に関する調査研究を行った。(鶴田)

B. 科学研究費

「美術史学における多角的情報処理システムの開発」(試験研究(2) 研究代表者 宮次男 研究分担者 柳澤 孝、田実栄子、三宅久雄、関口正之、三輪英夫、佐藤道信、山梨絵美子、米倉迪夫、島尾 新、鶴田武良、鈴木廣之)

日本東洋美術史に関する学術情報は、量的にも質的にも多様で高度な内容を持ち、これに対する需要も増加・多様化しつつある。然るに当該分野における情報処理は、かかる状況に対応しているといいがたい。美術史の分野では従来行われている単一の情報のみを扱うデータベースでは充分な対応は望めず、文字情報・画像情報等性格の異なる情報を有機的に結合したシステムの必要性が予測される。本研究はかかる認識のもとに美術史における学術情報データベースの構築に関する諸条件とシステム像の検討を具体的に行いながら、システム作成のための基礎研究を行うものである。本年度は以下のような調査・研究を実施した。

(1) 国立歴史民俗博物館、大和文華館等の先行機関のシステムを調査した。また、京都大学大型計算機センターで行われたシンポジウム「東洋学研究支援データベースの研究」に参加した。(宮・米倉・島尾・鈴木)

(2) 日本東洋古美術文献目録のデータベース化へ向けての実験として美術全集所載日本東洋古美術関係文献(1,600件)のデータベース化を行い、併せてデータベースの

出力結果を基に文献目録の作成を行った。

(3) 定期刊行物所載の日本東洋古美術関係文献データベース作成の基礎となる実験結果を報告書にまとめた。

7. 主要研究業績

①：著書・編書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表 ⑤：講演・放送 ⑥：その他
昭和60.4～昭和61.3

伊藤 延男(所 長)

- ③ 国宝大辞典 五 建造物(分担執筆) 講談社 60. 9
- ④ Some Problems on the Training of Conservators and Restorers
国際シンポジウム アジアの文化遺産の再発見 上智大学 60. 4
- ④ Present Condition of the Training of Specialists in the Conservation of
Cultural Properties in Japan 第9回国際研究集会 東文研 60.11
- ⑤ 文化財保護の現状と課題 社会教育主事講習会 社会教育研究所 60. 5
- ⑤ 人文科学と自然科学, 海外における保存制度・専門家養成の動向
博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 8
- ⑤ 博物館展示資料の保存科学 初任者研修会 日本博物館協会 60. 8
- ⑤ 日本建築の伝統 岩手県文化財愛護協会文化講演会 60. 8

美 術 部

柳澤 孝(美術部長)

- ② 真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵 (再) 「美術研究」332 60. 6
 - ③ 廃寺永久寺真言堂伝来真言八祖行状図とその関係資料展 東文研 60.10
 - ④ 絵画に関する最近の科学的調査方法と研究 重要文化資料研究協議会 60. 7
 - ④ 紫式部日記絵巻の構成に関する一試論 美術部・情報資料部研究会 61. 1
 - ⑤ 紫式部日記絵巻の表現と技法 一峰須賀本を中心に 五島美術館 60.11
- 関口 正之(第一研究室長)
- ② 尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について (4) 「美術研究」333 60. 9
 - ④ 平安時代後期仏画の一特色について 東京国立文化財研究所総合研究会 60. 5

調査研究

- ⑤ 弥勒信仰と仏画 金沢文庫 60. 11
 ⑤ 日本の仏画 根津美術館 60. 4

三輪 英夫(第二研究室長)

- ② 洋画界における新旧の対立／美術団体展の時代
 『日本洋画商史』美術出版社 60. 5
 ③ 作家略歴・作品解説(原田直次郎他) 『近代日本洋画素描大系』講談社 60. 5
 ③ 黒田清輝「智・感・情」 「季刊みづゑ」夏 935 60. 6
 ③ 日本近代洋画の確立 「黒田・藤島・和田」展図録 鹿児島市美術館 60. 10
 ③ 明治の洋風表現 「現代の眼」371 60. 10
 ③ 日本近代洋画の展開 「近代絵画の展望」展図録 常葉美術館 60. 11

田實 栄子(主任研究官)

- ② 片倉家伝来小紋胴服の修理及び復元構造について 「美術研究」332 60. 6
 ② 日光山輪王寺伝来胴着三領並びにそれらの修理及び復元構造について 上
 「美術研究」334 61. 1
 ③ 桃山時代の裂類のうち「紗綾」と「羅紗」について 天草郷土資料館 61. 2
 ③ 第32回日本伝統工芸展染織部門解説 同展福岡展会場 61. 2
 ⑥ 第32回日本伝統工芸展 染織部門鑑査委員 60. 8

三宅 久雄(主任研究官)

- ② 重源と鎌倉初期の美術 「文化財」265 60. 10
 ② 玉桂寺阿弥陀如来像とその周辺 「美術研究」334 61. 1
 ③ 兵庫浄土寺阿弥陀三尊像他 四天王寺と大阪・兵庫の古寺 集英社 60. 5
 ③ 京都泉涌寺韋駄天像他
 京都の美術工芸(京都市内編 下) 京都府文化財保護基金 61. 3
 ④ 仏師行快について 美術部・情報資料部研究会 60. 6
 ④ 肥前宝円寺旧蔵降三世明王像について 美術部・情報資料部研究会 60. 9
 ⑤ 鎌倉時代の造像工房 美術部・情報資料部夏期学術講座 60. 7
 ⑤ 止利から定朝へ 大宮市大宮公民館 60. 10
 ⑤ 巧匠安阿弥陀仏快慶 美術部・情報資料部公開学術講座 60. 11

佐藤 道信(第二研究室)

主要研究業績

- ③ 美術雑誌所載晩斎関係文献について 「晩斎」29 60.11
山梨絵美子(第二研究室)
- ② 一九世紀後半,二〇世紀初頭のアメリカにおける日本美術評価に関する一資料
「美術研究」334 61.1
- ② 日本近代女性洋画家による自画像をめぐる
おんなの四季を謳う展カタログ(板橋区立美術館) 61.2

芸 能 部

三隅 治雄(芸能部長)

- ② 新野の盆踊り 『民俗芸能』66 60.11
- ② 追体験折口芸能史 —沖繩のまればと—
『日本民俗研究大系』第6巻(芸能伝承) 国学院大学 61.2
- ③ 三河の花祭り 「芸能」 60.12
- ③ 新野の雪祭り 「芸能」 61.2
- ⑤ 民俗芸能の現状
国立オリンピック記念青少年総合センター民俗芸能指導者研修会 60.6
- ⑤ 民俗芸能が語るもの 慶応義塾大学松永記念公開講座 60.6
- ⑤ 沖縄舞踊・昔と今 芸能部公開学術講座 60.12
- ⑤ 『アジア民族芸能祭』 NHKTV 60.10
- ⑤ 『シルクロードの音楽』 NHKTV 61.1

佐藤 道子(演劇研究室長)

- ③ 南都声明の魅力 「学燈」83-3 61.3
- ④ 「唱礼」について 顕密仏教研究会 60.7
- ⑤ 仏教典礼とキリスト教典礼 東洋音楽学会大会 60.10
- ⑥ 東大寺修二会 「季刊邦楽」46 61.3

蒲生 郷昭(音楽舞踊研究室長)

- ② 長唄正本研究②~④(共同研究) 「邦楽と舞踊」418~429 60.4~61.3
- ② 近世初期風俗画に描かれた三味線について
「国立音楽大学音楽研究所年報」6 61.3

調査研究

- ③ 邦楽用語辞典 理論用語編(14)～(15) 補遺編(1)～(2)
「季刊邦楽」43～46 60.6～61.3
- ⑥ 官女・景清 第8回千寿の会プログラム 60.10
羽田 昶(民俗芸能研究室長)
- ④ 近代能楽史の諸問題 芸能部夏期学術講座 60.7
- ⑤ 青少年芸術劇場解説 熊本、長崎、佐賀、山口 60.8
- ⑤ 黒川能の技法 国立能楽堂シンポジウム 60.10
- ⑥ 84年の能楽界断想 『演劇年報1985年版』 60.5
- ⑥ 書評：『後藤得三芸談』 「芸能」 60.9
中村 茂子(主任研究官)
- ② 鳥追い行事と鳥追い芸 「民俗芸能研究」創刊号 60.5
- ② 風流躍論 ―南伊予の伊勢踊を中心に―
「日本民俗研究大系」第6巻(芸能伝承) 国学院大学 61.2
- ④ ささらの芸能 ―佐渡の小獅子舞― 民俗芸能学会 60.12
- ⑤ 武蔵野の民謡 TBS「美を求めて」 61.1
廣瀬 美都(演劇研究室)
- ② 日本の伝統音楽における記譜 ―古代・中世起源の音楽を中心に―
「記号学研究」5 60.5
- ③ 雅楽・仏教音楽関係項目 『大百科事典』 平凡社 60.6
- ④ 醍醐寺の年中行事について ―修正・修二会を中心に― 顕密仏教研究会 60.11
- ⑥ 討論の記録「宣ることと語ること」
「アジアアフリカ言語文化研究所通信」56 東京外国語大学 61.3
山田智恵子(音楽舞踏研究室)
- ⑥ 竹本津大夫芸話(採譜)第18回～第20回 「季刊邦楽」43～45 60.6～60.12
仲井幸二郎(民俗芸能研究室)
- ① 富山県民謡緊急調査報告書(共著) 富山県教育委員会 60.7
- ② シンポジウム 民謡 ―日本とヨーロッパ― 『魚津シンポジウム①』 61.3
- ③ 「近世歌謡」ほか 『研究資料日本古典文学』⑤ 明治書院 60.4
- ③ 口訳民謡集⑤⑥～⑦(連載) 「みんよう文化」 60.4～61.3

主要研究業績

- ③ 民謡風土記①～③(連載) 「思想新聞」637～675 60.4～12
- ③ 伝播の中の富山民謡 「富山県民謡緊急調査報告書」 60.7
- ③ 民謡関係項目 『大百科事典』 平凡社 60.11
- ⑤ うたの効用 民謡教養講座① 財団法人日本民謡協会 60.6
- ⑤ うたの旅 民謡教養講座② 財団法人日本民謡協会 60.6
- ⑤ うたの歴史 民謡教養講座③ 財団法人日本民謡協会 60.7
- ⑤ うたとおどり 民謡教養講座④ 財団法人日本民謡協会 60.7
- ⑤ 富山の童唄(対談) 国際証券セミナー 名鉄トヤマホテル 60.9

保存科学部

江本 義理(保存科学部長)

- ① 伊達家霊廟出土遺物の保存処置
「感仙殿伊達忠宗、善応殿伊達綱宗の墓とその遺品」(朝日新聞) 60.5
- ② 伊達家三代霊廟出土遺物の材質調査 同上 60.5
- ② Coloring Materials used on Japanese Mural Painting within Building
第9回国際研究集会 プロシーデングス壁画Ⅱ 60.11
- ② ガランドヤ古墳, 第一号墳の彩色顔料分析
「ガランドヤ古墳群」 日田市教育委員会 61.3
- ② 第9号墓棺内の保存環境 「長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書」 61.3
- ④ 出雲荒神谷遺跡出土銅剣の分析 昭和60年度重要文化資料研究協議会 60.7
- ④ 開陽丸引揚げ遺物の保存処理 第15回文化財保存修復研究協議会 60.10
- ④ Training of Conservation Scientist in the Course of Higher Education
and Refresher Course Sponsored by the Tokyo National Research Institute
of Cultural Properties 第9回国際研究集会 東文研 60.11
- ④ 埋蔵文化財の保存環境 一埋蔵環境における劣化現象一
保存科学研究集会(奈良国立文化財研究所) 61.3
- ⑤ 保存科学概論, 彩色材料 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60.8
- ⑤ 鉄製遺物の劣化現象
昭和60年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(奈良国立文化財研究所) 60.9

調査研究

- ⑤ 史料の保存科学 近世資料取扱講習会 60. 10
- ⑤ 文化財の保存と活用 文化財取扱講習会 61. 1
- 馬淵 久夫(化学研究室長)
- ② 安永田遺跡出土銅片の科学的鑑定(江本・平尾と共著) 「安永田遺跡」 60. 3
- ② 三雲遺跡出土青銅器・ガラス遺物の鉛同位体比(平尾と共著) 「三雲遺跡」 60. 3
- ② 凝灰岩の劣化と化学組成 「石造文化財の保存と修復」 60. 3
- ② お花山1号墳出土振文鏡 「お花山古墳群発掘調査報告書」 60. 3
- ② 島根県下出土青銅器の原料産地推定 「月刊文化財」 60. 6
- ② Lead Isotope Approach to the Understanding of Early Japanese Bronze Culture(平尾・西田と共著) 「Archaeometry」Vol. 27 60. 8
- ② 本郷遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比(平尾と共著) 「海老名本郷」1 60. 10
- ② Lead Isotope Ratios in Tokyo Bay Sediments and Their Implications in the Lead Consumption of Japanese Industries(平尾と共著) 「Geochemical Journal」Vol. 20 61. 2
- ② 鉛同位体比測定による火縄銃関係資料の原料産地推定 「朝倉氏遺跡資料館紀要」 61. 3
- ② 倉敷考古館提供の資料による青銅器の原料産地推定(平尾と共著) 「倉敷考古館研究集報」19 61. 3
- ③ 青銅器原料は海を渡ってきた 「科学朝日」12 60. 12
- ④ 青銅器の鉛同位体比測定 保存科学研究集会(奈良国立文化財研究所) 61. 3
- ⑤ 青銅器原料の産地推定 福井考古学会例会(福井県立博物館) 60. 4
- ⑤ 銅鐸の原料はどこから来たか 辰馬考古資料館講演 60. 10
- 見城 敏子(物理研究室長)
- ① 伊達家墳墓における微生物学的研究 「感仙殿伊達忠宗、善応殿伊達綱宗の墓とその遺品」 朝瑞鳳殿 60. 5
- ② 科学的に見た伝統漆工技術 「漆工史」 60. 12
- ② 菜畑遺跡の出土木器の塗膜の同定 「佐賀県教育委員会報告書」 60. 12
- ② 宮内10号墳石室から出土した珠玉の塗装について 「栃木県小山市教育委員会報告書」 61. 1

主要研究業績

- ② 第7号墓棺内の保存環境 「長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書」 61. 1
- ② 光モニターの利用 —展示照明の安全な使用のために— 「保存科学」25 61. 3
- ② 虎塚古墳の石室の温度環境について 「保存科学」25 61. 3
- ② 古代漆の分析の際の前処理 「保存科学」25 61. 3
- ⑤ 展示環境 —因子と劣化, 漆・膠
博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 8

新井 英夫(生物研究室長)

- ① 伊達家墳墓における微生物学的研究
『感仙殿伊達忠宗, 善応殿伊達綱宗の墓とその遺品』 朝日鳳殿 60. 5
- ① 文化財 『微生物の分離』 R & D プランニング社 61. 1
- ② 古墳等埋蔵環境における微生物学的研究 「考古学雑誌」71 60. 6
- ② 酸性紙の中和について(第1報) ジエチル亜鉛法の追試(森と共著)
「保存科学」25 61. 3
- ③ かびによる美術工芸品の損失 Bulletin SUT 2 60. 6
- ④ 紙質類文化財の保存に関する微生物学的研究(第2報) Foxing 要因糸状菌に
ついて 日本菌学会第29回大会 60. 5
- ④ 紙質類文化財の保存に関する微生物学的研究(第3報) 水分環境が紙の含水率
と糸状菌の繁殖に及ぼす影響 古文化財科学研究会大会 60. 5
- ④ 光学器機の生物劣化 日本発酵工学会大会 60. 10
- ④ 民具の生物劣化 文化財保存科学研究協議会 60. 10
- ⑤ 文化財と微・害虫及びその防除法 指定文化財修理技術者講習会 60. 7
- ⑤ 紙類の微生物による被害とその防除
(第7回書籍・古文書等のむし・かび害保存対策研修会) 朝文化財虫害研究所 60. 7
- ⑤ 文化財の生物劣化 —虫微害— 博物館・美術館等保存担当学芸員研修会 60. 8
- ⑤ 文化財の微生物による被害とその防除
(第7回文化財虫微害保存研修会) 朝文化財虫害研究所 60. 12
- ⑤ 文化財の生物被害とその対策 神奈川県博物館協会 60. 12

門倉 武夫(主任研究官)

- ① 感仙殿・善応殿墓室内空気について —伊達忠宗・伊達綱宗の墓室とその遺品—

調査研究

- 朝瑞鳳殿 60. 5
- ② 第7号墓棺内の保存環境調査 —江本・見城・新井と共同—
「長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書」 61. 3
- ② 古墳石室内の照明 「保存科学」25 61. 3
- ③ 壁画公開は光ファイバーで 「科学朝日」48—13 60.12
- ⑤ 展示環境Ⅱ —環境と劣化— 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 8
- ⑤ 可搬式X線回折装置の文化財への応用
東京国立文化財研究所総合研究会 60. 9
- 石川 陸郎(主任研究官)
- ② 博物館・美術館の照明のあり方 「電設レポート」6 60. 6
- ③ ラジオグラフィーの目 —木造阿弥陀如来立像—
「軟X線研究会誌」Vol.1 61. 1
- ⑤ 文化財と保存環境 —温・湿度調整, 照度調整等—
第5回指定文化財取扱講習会 東日本ブロック 60. 7
西日本ブロック 60.11
- ⑤ 文化財の照明・科学写真の文化財への応用
博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 7
- ⑤ 立体X線撮影について 昭和60年度重要文化資料研究協議会 60. 7
- ⑤ 内側から見た金色堂 —巻柱を中心として— 中尊寺ゼミナール 60. 8
- ⑤ 文化財の照明管理 第4回群馬県文化財保存対策研修会 60.10
- 三浦 定俊(主任研究官)
- ② エミシオグラフィの黒田清輝画油絵調査への応用
「古文化財の科学」30 60.12
- ③ 下描きまで映した赤外線TV 「科学朝日」45—13 60.12
- ④ 超音波伝搬速度による石造文化財の合成樹脂処置効果の判定
NDI第三分科会 60. 5
- ④ ガンマ線透視写真の定量化 第7回古文化財科学研究会講演会大会 60. 5
- ④ ガンマ線透視による金銅仏調査とその研究
法隆寺献納宝物第四次調査会 60. 7

主要研究業績

- ④ ガンマ線透視撮影による金銅仏内部の物質の判定
第24回 SICE 学術講演会 60. 7
- ④ The Emissiography by a Thin Tin Filter
第7回 RESES シンポジウム 60. 8
- ④ 肥前宝門寺旧藏降三世明王像について(三宅と共同)
美術部・情報資料部研究会 60. 9
- ④ 産業用X線CTスキャナーの小金銅仏調査への応用(藤井と共同)
NDI 第三分科会 60.12
- ④ Critical Climate That Causes Frost Shattering of Stone Objects(西浦・福田と共同)
谷口国際シンポジウム(国立民族学博物館) 60.12
- ⑤ 立体X線撮影について(石川と共同)
昭和60年度重要文化資料研究協議会 60. 7
- ⑤ 温湿度の計測, 科学写真の文化財への応用
博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 8
- ⑤ 文化財の温湿度管理
第4回文化財保存対策研究会(群馬県立歴史博物館) 60.10
- ⑥ 金銅仏ガンマ線透視撮影資料
金銅仏2(法隆寺献納宝物特別調査概報VI) 61. 3
- 森 八郎(生物研究室)
- ② 硼素化合物による防虫処理(第2報) —ゴキブリに対する効力試験—
「文化財の虫菌害」10 60.12
- ② 酸性紙の中和について(第1報) ジエチル亜鉛法の追試(新井と共同)
「保存科学」25 61. 3
- ③ 文化財のシロアリ被害
「しろあり」62 60.10
- ④ 硼素剤による防虫処理(第4報) ゴキブリに対する効力試験
日本応用動物昆虫学会第29回大会 60. 4
- ④ 建造物内のダニについて
第7回古文化財科学研究会講演会大会 60. 5
- ④ イエシロアリの処女地発生について
日本ベストロジー研究会第1回発表会 60.11

調査研究

- ⑤ The Formosan Subterranean Termite in Japan : Its Distribution, Damage and Current and Potential Control Measures.
International Symposium Held by the Pacific Branch of Entomological Society of America (Sixty-Ninth Annual Meeting) 60. 6
- ⑤ 書籍・古文書等を加害する昆虫とその被害対策
(第8回書籍・古文書等のむし・かび害保存対策研修会講演)
勸文化財虫害研究所 60. 7
- ⑤ 燻蒸処理標準仕様と危害防止措置及び燻蒸効果の判定について
(第6回文化財の燻蒸処理実務講習会講演) 勸文化財虫害研究所 60. 10
- ⑤ 古書・古文書・仏像の虫害対策
(東京都江東区芭蕉記念館講演) 東京都江東区教育委員会社会教育課 60. 10
- ⑤ 文化財の虫害と防除
(第8回文化財虫菌害保存研修会講演) 勸文化財虫害研究所 60. 12
- ⑤ 文化財の虫害対策(第8回文化財虫菌害対策)
(第8回文化財虫菌害防除作業主任者能力認定講習会講演)
勸文化財虫害研究所 61. 2
- ⑥ イエシロアリの巢の所在探知の指導(ハワイにおいて現地指導)
The Pacific Branch of Entomological Society of America
(Sixty-Ninth Annual Meeting) 60. 6

修復技術部

鈴木 友也(修復技術部長)

- ② 称名寺藏金銅製宝篋印塔についての一考察 「金沢文庫研究」275 60. 9
- ⑤ 保存修復概論 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 7
- ⑤ 伝統技法と保存科学の適用 指定文化財展示取扱講習会 60. 7, 60. 11
- ⑤ 文化財の調書作成 工芸品1(金土, 刀剣, 甲冑等) (同上) 60. 7, 60. 11

中里 寿克(第一修復技術研究室長)

- ② 鎌倉時代漆芸技法資料 I 一梅蒔絵手箱一 「保存科学」25 61. 3
- ② 山口県龍藏寺藏鎌金四天王像図屏の保存修復(受託研究報告56号)

主要研究業績

「保存科学」25 61. 3

増田 勝彦(第二修復技術研究室長)

- ⑤ 奈良時代の紙 古文化財科学研究会例会 60. 6
- ⑤ 和紙製造の技術 文化財虫害研究所研修会 60. 7
- ⑤ 表具の科学 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 8
- ⑤ Oriental Techniques for Paper Conservation
Paper Conservation Course, ICCROM 60.10
- ⑥ 芝居絵巻馬の保存処置に関する研究(共著) 「受託研究報告」 61. 3

樋口 清治(第三修復技術研究室長)

- ① 新エポキシ樹脂(共著) 昭晃堂 60. 5
 - ③ 故櫻井高景先生を偲んで ―わが国における合成樹脂利用研究の先覚―
「古文化財の科学」30 60.12
 - ④ 顔料彩色剥落どめに用いる合成樹脂とその問題点
第7回古文化財科学研究会講演会大会 60. 5
 - ④ 泥下地彩色の剥落どめ 文化財保存修復研究協議会 60.10
 - ⑤ 文化財の劣化と防止策 II 指定文化財展示取扱講習会 東ブロック 60. 7
西ブロック 60.11
 - ⑤ 文化財の修復と合成樹脂 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 8
 - ⑤ 保存科学と合成樹脂 東京農工大学繊維博物館 60. 8
 - ⑤ 材料(特殊材) 昭和60年度文化財建造物修理主任技術者講習会 60. 9
 - ⑤ 保存材料の沿革
昭和60年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(鉄器保存過程) 60. 9
 - ⑤ 高分子材料 東京芸術大学美術教育研究室 60.11
- 西浦 忠輝(主任研究官)
- ② ドリルのボーリング速度による石材の劣化状態及び樹脂含浸強化効果の判定
(ドゥウィッタと共著) 「古文化財の科学」30 60.12
 - ② 文化財の保存を目的とした歴史的住宅建築の構造的補強法(新修理技法)の開発
に関する研究; 接合部の強度について(伊藤・安藤と共著)
「住宅建築研究所報」12 61. 3

調査研究

- ② 工学的診断調査 —古石材の診断及び再用のための保存修復処置—
「重文・園比屋武御嶽石門修理報告書」 61. 3
- ② 史跡・薬師堂石仏の保存修復処置に関する研究〈受託研究報告書〉(三浦と共著)
「薬師堂石仏保存修理調査事業報告書」 61. 3
- ② 薬師堂石仏の岩石の物性(比重・空隙率・吸水速度)について 同上 61. 3
- ③ 「蘭陵王の図」絵馬の保存修復処置 —絵馬伸縮測定— 「なりた」33 60. 6
- ④ ドリルのボーリング速度による石材の劣化状態及び樹脂含浸強化効果の判定
(ドゥウィッタと共同) 第7回古文化財科学研究会講演会大会 60. 5
- ④ Critical Climate That Causes Frost Shattering of Stone Objects(三浦・福田と共同) 谷口国際シンポジウム(国立民族学博物館) 60.12
- ⑤ ベルギー王立文化財研究所における共同研究
東京国立文化財研究所総合研究会 61. 1

青木 繁夫(主任研究官)

- ② 福岡市樋渡遺跡出土銅製品の保存修復研究 「保存科学」25 61. 3
- ② お花山1号墳出土変形振文鏡の保存修復
「山形県埋蔵文化財調査報告」85 60. 4
- ⑤ 金属製品保存の問題点 文化庁修理技術者講習会 60. 9
- ⑤ 金属製品の保存修復 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 60. 7
- ⑤ 考古資料の保存について 群馬県埋文センター発掘技術者講習会 60. 8

情報資料部

宮 次男(情報資料部長)

- ② わが国の仏教説話画
「全集日本の古寺」15 四天王寺と大阪・兵庫の古寺 集英社 60. 5
- ② 高僧・祖師伝絵 同4 甲斐・東海の古寺 集英社 60. 6
- ② 縁起絵について 同5 石山寺と近江の古寺 集英社 60. 7
- ② 法華経変相図 「日本の古典文学」3 一冊の講座絵解き 有精堂 60. 9
- ② 八幡大菩薩御縁起と八幡縁起 上 「美術研究」333 60. 9
- ② 研究資料・永福寺本遊行上人縁起絵 同上 60. 9

主要研究業績

- ② 八幡大菩薩御縁起と八幡縁起 中 「美術研究」335 61. 3
- ③ 法華經の美術 「全集日本の古寺」4 甲斐・東海 of 古寺 集英社 60. 6
- ③ 美と祈りの法華經 日蓮と法華經信仰 読売新聞 60. 12
- ③ 絵でたどる法華經二十八品の教え 同上 60. 12
- ⑤ 絵巻物をめぐって 横浜朝日カルチャーセンター 60. 6
- ⑤ 仏教絵画と絵巻 同上 60. 8
- ⑤ 金光明最勝王經金字宝塔曼荼羅圖について 中尊寺 60. 9
- ⑤ 中世絵巻の傾向 颯川美術館 60. 9
- ⑤ 絵巻物と世俗画 金沢文庫 60. 11
- ⑤ 一遍上人伝絵について 神奈川県立博物館 60. 11
- ⑤ 日本における法華經絵の展開 美術部・情報資料部公開学術講座 60. 11
- ⑤ 法華經絵画について 立正大学 60. 12

米倉 迪夫(文献資料研究室長)

- ② 西導寺蔵「法然上人伝絵」について 「重文法然上人絵伝双幅」 法然上人絵伝刊行会 60. 9
- ③ 研究資料 無量寿寺本「拾遺古徳伝絵」 「美術研究」332 60. 6
- ④ 無量寿寺本「拾遺古徳伝絵」 美術部・情報資料部研究会 60. 7

鶴田 武良(写真資料研究室長)

- ② 宋紫石 一旅日中国画家研究(国華1028号掲載論文の中文訳) 「美術」1985年 6 期 60. 6
- ② 現代中国画家人伝 1・王式廓 「中国水墨画」2 60. 8
- ③ 当代中国刊行美術関係期刊解題 I 「美術研究」332 60. 6
- ③ “ II 「美術研究」333 60. 9
- ③ “ III 「美術研究」334 61. 1
- ③ 吸収期の鉄斎 「鉄斎 一吸収の時代展目録」 鉄斎美術館 60. 2
- ④ 中国における西洋画の受容 東京国立文化財研究所総合研究会 61. 3
- ⑥ 聞書「大正～昭和初期における中国画コレクションの成立・I」 「中国水墨画」2 60. 8
- ⑥ 八大山人の生涯と芸術(翻訳) 「中国水墨画」2 60. 8

調査研究

⑥ 古代中国における紙質文化財の薬物による防蠹技術(翻訳)

「文化財の虫菌害」10 60. 12

鈴木 廣之(写真資料研究室)

③ 研究資料 廻国道の記 (3)

「美術研究」333 60. 9

④ 円山応震筆駝図をめぐって

近世絵画研究会 60. 10

島尾 新(文献資料研究室)

② 瓢鮎図の研究 一大岳周崇の序に見える「新様」を中心として一

「美術研究」335 60. 3

Ⅳ. 事 業

1. 出 版

(1) 美術研究

60年度は332号から335号までが下記の内容で刊行された。A 4判, 各号40頁, 原色図版1(335号から2), 単色図版8。

美術研究 332号(昭和60年6月発行)

- | | |
|------------------------------|-------|
| 真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵(四) | 柳澤 孝 |
| 無量寿寺本「拾遺古徳伝絵」(研究資料) | 米倉 迪夫 |
| 片倉家伝来小紋胴服の修理及び復元模造について(研究資料) | 神谷 栄子 |
| 当代中国刊行美術関係期刊解題(一)(研究資料) | 鶴田 武良 |

美術研究 333号(昭和60年9月発行)

- | | |
|-------------------------|-------|
| 八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 上 | 宮 次男 |
| 尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について(四) | 関口 正之 |
| 永福寺本遊行上人縁起絵(研究資料) | 宮 次男 |
| 廻国道の記(公刊) 三(研究資料) | 鈴木 廣之 |
| 当代中国刊行美術関係期刊解題(二)(研究資料) | 鶴田 武良 |

美術研究 334号(昭和61年1月発行)

- | | |
|--|-------|
| 日光山輪王寺伝来胴着三領並びにそれらの修理及び復元模造について 上 | 神谷 栄子 |
| 玉桂寺阿弥陀如来像とその周辺 | 三宅 久雄 |
| 19世紀後半, 20世紀初頭のアメリカにおける日本美術評価に関する一資料
(研究資料) | 榎田絵美子 |
| 当代中国刊行美術関係期刊解題(三)(研究資料) | 鶴田 武良 |
| 原田直次郎筆素尊斬蛇画稿(図版解説) | 三輪 英夫 |

美術研究 335号(昭和61年3月発行)

事 業

「伊勢物語図」(小野の御室)について

—いわゆる「貴紳邸宅図」の主題と表現—

秋山 光和

八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 中

宮 次男

瓢鮎図の研究 一大岳周崇の序に見える「新様」を中心として—

島尾 新

(2) 日本美術年鑑・昭和59年版(昭和61年3月発行)

本年度は昭和58年の内容をもつ昭和59年版を刊行した。B5版, 322頁。

昭和57年美術界年史

美術展覧会(現代美術・西洋美術)

美術展覧会(東洋古美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(現代美術・西洋美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(東洋古美術)

物故者

(3) 音盤目録Ⅳ

東京国立文化財研究所編 昭和61年3月発行

(4) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査, 研究, 受託研究報告等の論文, 報告及び修復処置概報等を掲載している。本年度は第25号を発行した。

保存科学 第25号(昭和61年3月発行)

鎌倉時代漆芸技法資料 I —梅蒔絵手箱・片輪車蒔絵螺鈿手箱— 中里 寿克

古墳石室公開時の照明 門倉 武夫

光モニターの利用 —展示照明の安全な使用のために— 見城 敏子

虎塚古墳の石室の温度環境について 見城 敏子

古代漆の分析の際の前処理 見城 敏子

酸性紙の中和について(第1報) ジェチル亜鉛法の追試 新井英夫・森 八郎

山口県龍蔵寺藏鎗金四天王像図屏の保存修復(受託研究報告第56号) 中里 寿克

福岡市樋渡遺跡出土銅製品の保存修復研究(受託研究報告第57号) 青木 繁夫

(5) 国際研究集会プロシーディングス

The 8th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property—(Conservation and Restoration of Mural Paintings(II)—(1985)

「壁画の保存」を主題とした、保存科学部・修復技術部担当の2年継続の国際研究集会の第2回目(59. 11. 19~11. 22)のプロシーディングス(英文)を刊行した。第1回目は、古墳や洞窟内の壁画の保存に関連した内容であり、今回(第2回)では、地上にある壁画として、主に建造物内の壁画の保存・修復に関連した内容を取扱った。日本の壁画として、張付壁、襖、屏風なども含むものとして発表が行われた。本プロシーディングスには、発表論文、質疑応答、総合討議などが含まれている。内容は下記の通りである。

Jukka JOKILHTO: Painted Surfaces in European Architecture

Nobuo ITO: The Use of Color in Japanese Architecture

Terukazu AKIYAMA: Japanese Wall Paintings: An Art Historical Overview

Rakhaldas SENGUPTA: Conservation and Restoration of Mural Paintings in India

Kakichi SUZUKI: Administrative Measures for the Conservation of Mural Paintings on Japanese Architecture

Garry THOMSON: Mural Paintings and Their Environment

Ippolito MASSARI: Some Aspects of Humidity Protection in Historic Buildings

Toshiko KENJO: An Environmental Survey of the Ninomaru Palace *Ohiroma* in Nijo Castle

Takashi HAMADA: Historical View of the Techniques of Japanese Mural Paintings

Wannipa NA SONGKHLA: Traditional Thai Mural Painting and Its Conservation

事 業

Samidi SISWOWIYANTO: Some Mural Paintings in Traditional Indonesian Houses and Problems of Their Conservation

Yoshimichi EMOTO: Coloring Materials Used on Japanese Mural Paintings within Buildings

J. R. J. VAN ASPEREN DE BOER: Infrared Reflectography of Paintings; Principles, Development and Applications

Shojiro YAMAZAKI: Reproduction of Colored Patterns in Temples and Shrines

Taka YANAGISAWA: Examining Japanese Wall Paintings(from the 7th through 14th centuries)Using Physico-optical Methods

Akiyoshi WATANABE: Some Problems on the Damages and Restoration of Japanese Panel Paintings within Wooden Buildings

Xu YUMING: Exploration in Conservation and Restoration of Mural Paintings in Ancient Temples and Taoist Temples in China

Paul M. SCHWARTZBAUM: The Conservation and Restoration of the Fire-damaged Paintings of the Dome of the Al Aqsa Mosque, Jerusalem

Katsuhiko MASUDA: Documenting the Damages of Mural Paintings
Overall Discussion

2. 公開学術講座

美術部・情報資料部(第19回)

日 時 昭和60年11月30日(土) 13:30~16:30

会 場 日本経済新聞社小ホール(9階)

講 演 (1) 巧匠安阿弥陀仏快慶

三宅 久雄

(2) 日本における法華経絵の展開

宮 次男

芸能部(第17回)

日 時 昭和60年12月9日(月) 18:00~20:30

会 場 朝日新聞社朝日ホール

夏期学術講座

テーマ 沖縄舞踊の技法

講演 (1) 沖縄舞踊・昔と今

芸能部長 三隅 治雄

(2) その技法・周辺諸国との比較

芸能部長 三隅 治雄

実演と話

川田 禮子・仲濱 靖一

黛 節子・朴 貞子

秋元加代子

3. 夏期学術講座

美術部・情報資料部(第3回)

本年度は「鎌倉時代の美術Ⅲ」をテーマとし、別表のような日程で当研究所会議室において開催された。本年度の受講者は33名。

別表 テーマ 一鎌倉時代の美術 Ⅲ一

7月15日(月)

1. 開会の辞

所長 伊藤 延男

2. 鎌倉時代の輸入陶磁器と国産陶磁器

東京国立博物館工芸課陶磁室長 矢部 良明

3. 鎌倉時代の造像工房

美術部主任研究官 三宅 久雄

4. 黒田記念室の見学(解説・三輪英夫)

5. 美術作品の写真撮影(解説・市川和正)

7月16日(火)

6. 舍利荘蔵具から見た鎌倉時代の金工

奈良国立博物館学芸課工芸室長 河田 貞

7. 鎌倉時代絵画の特色

筑波大学教授 真保 亨

8. 四講師に対する質問と懇談

芸 能 部

芸能部においては、芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として、例年、夏期4日間にわたる学術講座を実施している。会場を東京国立文化財研究所会議

事業

室とし、芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に講ずるかたちをとる。60年度は「近代能楽史の諸問題」というテーマを設け、羽田昶(民俗芸能研究室長)が担当し、7月8日から7月12日までの4日間にわたり実施した。受講対象は都内各大学の大学院生とし、本年度は、東京芸大・早稲田・明治・国学院・玉川学園大の各大学院生で、受講者数は13名。日程およびテーマ細目は下記の通りである。

7月8日(月)

1. 能楽保護の施策 (1)
2. 能楽保護の施策 (2)
3. 能の興行形態

7月9日(火)

4. 宗家の退転と復興 (1)
5. 宗家の退転と復興 (2)
6. 近代能楽の確立者

7月11日(木)

7. 技法の変遷 (1)
8. 技法の変遷 (2)
9. 技法の変遷 (3)

7月12日(金)

10. 能楽現代化の事象
11. 能舞台・能楽堂の変遷
12. 質疑応答

4. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

近年、地方においては博物館・美術館等の数が増加すると共にその施設が近代化し、くん蒸室、保存科学室、修復室等の保存に関する部門や施設設備が整備されて、学芸員のうちからこれら保存部門を担当する職員が配置されてきている。しかし、これらの職員が保存科学、技術の知識を習得しようとしても適切な学習の場や教材がないのが実情である。そのため博物館・美術館等の学芸員で保存を担当する者に対して、文化財の科学的保存に関する基礎的な知識及び技術について研修を行い、その資

博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし研修会を開催した。受講者数15名。日程及び研修題目・講師は下記の通りであった。

7月29日(月)

1. 開会式・オリエンテーション
2. 保存科学概論 保存科学部長 江本 義理
3. 人文科学と自然科学 所 長 伊藤 延男

7月30日(火)

4. 海外における保存制度・専門家要請の動向 伊藤 延男
5. 文化財の分析化学 I 保存科学部化学研究室長 馬淵 久夫
6. 文化財の分析化学 II 馬淵 久夫

7月31日(水)

7. 保存修復概論 修復技術部長 鈴木 友也
9. 展示環境 I 一環境と劣化一 保存科学部主任研究官 門倉 武夫
10. 施設見学 一東京国立博物館・資料館・法隆寺館環境コントロール室一
門倉 武夫

8月1日(木)

11. 文化財の有機化学 一漆・にかわ一
保存科学部物理研究室長 見城 敏子
12. 文化財の生物劣化 一虫害と対策一
保存科学部生物研究室長 新井 英夫
13. 実 習 一虫・かび害と対策 I一 新井 英夫
14. 実 習 一虫・かび害と対策 II一 新井 英夫

8月2日(金)

15. 温湿度の計測 保存科学部主任研究官 三浦 定俊
16. 文化財の照明 保存科学部主任研究官 石川 陸郎
17. 実 習 一光源の扱い一 石川 陸郎

8月3日(土)

18. 彩色材料 江本 義理

8月5日(月)

事業

- | | |
|-------------------|-------|
| 19. 実習 一くん蒸一 | 新井 英夫 |
| 20. 展示環境Ⅱ 一因子と劣化一 | 見城 敏子 |
| 21. 実習 一展示環境一 | 見城 敏子 |

8月9日(火)

- | | | |
|-----------------|-----------------|-------|
| 22. 表具の科学 | 修復技術部第二修復技術研究室長 | 増田 勝彦 |
| 23. 実習 一表具一 | | 増田 勝彦 |
| 24. 金属文化財の保存修復修 | 修復技術部主任研究官 | 青木 繁夫 |

8月7日(水)

- | | |
|-------------------|-------|
| 25. 実習 一温湿度機器の補正一 | 三浦 定俊 |
| 26. 科学写真の文化財への応用 | 石川 陸郎 |
| | 三浦 定俊 |
| 27. 実習 一科学写真Ⅰ一 | 石川 陸郎 |
| 28. 実習 一科学写真Ⅱ一 | 石川 陸郎 |

8月6日(金)

- | | | |
|-----------------|-----------------|-------|
| 29. 実習 一科学写真Ⅲ一 | 三浦 定俊 | |
| 29. 文化財の修復と合成樹脂 | 修復技術部第三修復技術研究室長 | 樋口 清治 |
| 30. 実習 一合成樹脂一 | | 樋口 清治 |

8月10日(土)

31. レポート作成・閉会式

5. 会議

文化財の保存及び修復に関する研究のための国際研究集会

昭和52年度より毎年開催している本年度の集会(第9回)は、「各種文化財に関する専門家の養成」をテーマとして、所長の担当で開催した。今回、特にとりあげられた議題は博物館等における文化財保存の技術者ならびに各種文化財の修復技術者の養成について、であって、これには伝統芸能も含まれる。その具体的内容は、各発表題目の通りである。

発表者は海外8名、国内9名で発表は4セッションに分けて、次のような日程で行われた。

会 議

名 称 The Ninth International Symposium on the Conservation and
Restoration of Cultural Properties

—The Training of Specialists in Various Fields Related to Cultural
Properties—

第9回文化財の保存修復に関する国際研究集会

—各種文化財に関する専門家の養成—

日 時 昭和60年11月18日(月)～21日(木)

場 所 国立社会教育研修所

(題名及び発表者)

11月18日(月)

第1セッション 各国・各地域からの概況報告

(アルファベット順)

オーストラリア C. ペアソン

中華人民共和国 張 羽新

イ ン ド P. O. アグラワル

インドネシア H. スパディオ

日 本 伊藤 延男

大 韓 民 国 T. Y. リー

オ ラ ン ダ J. ロデウィックス

タ イ W. N. ソンクラー

イクロムートルコ C. エルダー

11月19日(火)

第2セッション 博物館専門家・修復技術者・芸能後継者の養成等

1. Training of Museum Officers in the Course of Higher Education(学校教育における博物館学芸員の養成) 渋谷区立松濤美術館 藤田 国雄

2. The Present Condition and Training of Museum Specialists in China(中国における博物館専門家の現状と養成) 中国文化部文物局幹部所 張 羽新

3. Training Courses for Museum Curators and Restorers of Art Object(博物館学芸員と美術品修理技術者のトレーニングコースについて)

東京国立博物館 西川杏太郎

事 業

4. Preservation of the Techniques of Applied Arts and the Training of Their Transmitters and Restorers(日本における工芸技術の保存とその後継者ならびに修理技術者の養成について) 東京国立文化財研究所 鈴木 友也
5. The Training of Restorers(修復技術者の養成)
オランダ保存修復担当鑑査官 J. ロデウィックス
6. Training of Transmitters of Traditional Performing Arts at the National Theater of Japan(日本の国立劇場における伝統芸能の後継者の養成について)
国立劇場 榎本由喜雄

11月20日(水)

第3セッション 建造物・遺跡保存技術者、保存科学者の養成等

7. Training of Specialists in Various Fields Related to Cultural Properties—The Situation in Indonesia— (文化財保護に関する各領域での専門家の養成—インドネシアの現状—) インドネシア文化局 H. スパディオ
8. Training of Architects as Conservators in the Course of Higher Education in Japan(学校教育における保存建築家の養成) 東京大学 稲垣 栄三
9. Training of Specialists in Conservation of Mural Painting(壁画保存専門家の養成) タイ壁画保存担当官 W. N. ソンクラ
10. Training of Conservation Specialists for Cultural Property Buildings(文化財建造物修理技術者の養成) 文化庁文化財保護部 鈴木 嘉吉
11. Status of Training Courses in Conservation(保存における養成コースの位置) インド国立文化財保存研究所 O. P. アグラワル
12. Training of Conservation Scientists in the Course of Higher Education and Refresher Course Sponsored by the Tokyo National Research Institute of Cultural Properties(保存担当者の学校教育における養成及び東京国立文化財研究所における養成研修) 東京国立文化財研究所 江本 義理
13. A Proposal for the Curriculum and Syllabus of the Scientific Principles on the Training of Conservation Specialists(保存専門家養成についての科学的基本方針に基づく履修課程及び教授要綱の提案) ソウル大学 T. Y. リー
14. Training of Archaeologists in the Course of Higher Education and

会 議

Refresher Courses Sponsored by the Nara National Cultural Properties

Research Institute(学校教育における考古学者の養成及び奈良国立文化財研究所
における養成研修) 奈良国立文化財研究所 坪井 清足

15. Training in the Conservation of Cultural Materials in Australia(文化財
保存における養成) キャンベラ大学 C. ペアソン

11月21日(木)

第4セッション イクロム活動・討議

16. ICCROM and Training for the Conservation of Cultural Properties(文
化財保存のためのイクロムと養成) イクロム C. エルダー

17. 総合討議 司会 C. エルダー, 伊藤 延男

《参加者》

文化庁及び附属機関・博物館・美術館職員, 諸大学教官等81名。

保存科学部・修復技術部

第15回文化財保存修復研究協議会

日 時 昭和60年10月21日

会 場 東京国立文化財研究所会議室

主 題 近世以降の文化財保存・修復について〔I〕

近年, 比較的年代は新しいが特定の地域においては重要な意味をもつた
め, その保存・修復について取上げられるようになった, 民具, 漁撈具
あるいは絵馬や薬製品などの保存・修復に関し, 下記の研究協議が行わ
れた。

発表課題・発表者

(1) 民具の保存について

文化庁文化財保護部伝統文化課主任文化財調査官 天野 武

(2) 漁撈具の保存・修復処理

元興寺文化財研究所研究部保存科学研究室長 増沢 文武

(3) 民家の材料の耐久性

文化庁文化財保護部建造物課主任文化財調査官 宮沢 智士

事 業

(4) 泥下地彩色の剥落止め

東京国立文化財研究所修復技術部第三修復技術研究室長 樋口 清治

(5) 民具等の生物劣化

東京国立文化財研究所保存科学部生物研究室長 新井 英夫

(6) 開陽丸引揚げ遺物の保存処理

東京国立文化財研究所保存科学部長 江本 義理

昭和60年度文化財の保存に関する懇談会

日 時 昭和61年2月19日(水)

場 所 東京国立文化財研究所会議室

この会議は、文化財の保存及び修復に関し、当研究所と文化庁側との意見交換の場として調査研究が円滑に推進され、また、文化財保護事業が効果的な運営をもたらすことを目的として、文化庁の担当官の出席を求めて懇談している。今年度は文化財保護部長を始め、伝統文化課、記念物課、美術工芸課及び建造物課の担当官が出席した。

当研究所から主に本年度における各部の調査研究の成果を報告し、次年度の調査研究計画の説明を行った。また、文化庁側から重要文化財荒神谷遺跡出土銅剣の修復並びに中国敦煌莫高窟壁画保存修復協力費が当研究所特別研究として予算計上されることになった経緯などの報告があり、研究協力について申入れがあった。

昭和60年度重要文化資料研究協議会(第21年度)

我が国に伝来した文化財のうち、我が国の歴史上、芸術上、学術上価値の高い重要文化資料について、その保存活用に資するため文化庁及び施設等機関の研究員等が研究、協議することを目的とするこの協議会は、本研究所を当番機関として「文化財に関する科学的調査方法」を討議課題として、3日間の日程で下記のとおり開催された。

日 時 昭和60年7月3日(水)～5日(金)

会 場 東京国立文化財研究所会議室・東京国立博物館小講堂

見 学 寛永寺の文化財、文化庁保有品

発表課題・発表者

絵画に関する最近の科学的調査方法と研究

東文研 美術部長 柳澤 孝

国際・国内交流

立体X線撮影について 東文研 保存科学部主任研究官 石川 陸郎

同 三浦 定俊

青銅原料の産地推定 一鉛同位体比一

東文研 保存科学部化学研究室長 馬淵 久夫

年輪年代学 奈文研 埋文センター研究員 光谷 拓実

出雲荒神谷遺跡出土銅剣の現状

文化庁 美術工芸課主任文化財調査官 三輪 嘉六

出雲荒神谷遺跡出土銅剣の分析 東文研 保存科学部長 江本 義理

螺鈿の技法について

東文研 修復技術部第一修復技術研究室長 中里 寿克

6. 国際・国内交流

(1) 職員の国際交流

所 長

伊藤所長は、イクロム(ローマ国際文化財保存センター)日本政府代表に任命されており、かつその理事及び財政・事業委員会委員に選出されているので、昭和60年度も次の2回イタリア国に出張した。

1. 第18回財政・事業委員会及び第39回理事会出席のため、昭和60年5月3日より12日まで。

2. 第19回財政・事業委員会出席のため、昭和61年2月5日より10日まで。

また、イクロムとゲティ財団の共同主催になる世界主要文化財保存研究所長会議がイクロム本部で開催されたので、これに出席のため昭和60年12月4日より9日までイタリア国に出張した。

次に東洋諸国への出張は次の2件であった。すなわち、昭和60年6月25日より7月8日までは、中華人民共和国に出張し、敦煌石窟の保存事業に関する総合的助言をするための基礎資料蒐集及び石窟保存関係者との学術交流を行い、また、11月1日より4日までは大韓民国に出張して、第8回馬韓・百濟文化国際学術会議に参加して研究発表を行った。

事業

美術部

第二研究室佐藤道信研究員は、文部省在外研究員として昭和60年8月1日から昭和61年6月30日までアメリカ合衆国に滞在し、同国所在の近代日本美術の調査研究を行った。

芸能部

三隅治雄芸能部長は、民俗舞踊の調査のため、昭和61年2月1日より14日まで、マレーシア連邦に出張し、西マレーシアの各地及びボルネオ島サバ州の舞踊・音楽の調査研究を行った。

修復技術部

第二修復技術研究室長増田勝彦は、昭和60年9月25日から10月31日まで、西ドイツシュツットガルト及びハイデルベルグ所在のベルツコレクションのうちの掛軸類の修理調査を行った後、ICCROM(イタリア、ローマ市)で、紙本文化財修復のための基礎実技コースにおいて、講義と実技指導を行った。

情報資料部

鶴田武良写真資料研究室長は、張大千研究討論会に出席のため、昭和61年3月29日から同月31日まで、中華民国に研修旅行を行った。

(2) 海外研究者の来訪

S.60.4.1~61.3.31

国名	所 属	氏 名
アメリカ	カリフォルニア大学教授	A. P. シュニービン
中華人民共和国	中国山西省博物館陳列部	喬 淑 芝
中華人民共和国	中国陝西乾陵博物館館長	楊 正 興
中華人民共和国	陝西省文物保護考察団	張 錦 秋
中華人民共和国	陝西省文物保護考察団	王 天 星
中華人民共和国	陝西省文物保護考察団	李 西 興

国名	所 属	氏 名
中華人民共和国	陝西省文物保護考察団	張 斌
大韓民国	文化公報部文化財管理局	李 洪 宰
大韓民国	文化公報部文化財管理局	安 辰 洙
大韓民国	韓国文化院	李 德
フランス	イコモス	M. D. ラベール
インドネシア	文化総局長	H. スパディオ
アメリカ	国立美術館、紙の保存家	A. ドワン
イギリス	ウィンザー城王立図書館学芸員	J. バクスター
イギリス	ウィンザー城王立図書館学芸員	M. ウォーンズ
西ドイツ	東アジア芸術博物館	B. P. ボーガーズ
中華人民共和国	中国「故宫博物院紫禁城芸術展」代表団	于 堅
中華人民共和国	中国「故宫博物院紫禁城芸術展」代表団	金 楓
中華人民共和国	中国「故宫博物院紫禁城芸術展」代表団	李 毅 華
中華人民共和国	中国「故宫博物院紫禁城芸術展」代表団	梁 匡 忠
中華人民共和国	中国「故宫博物院紫禁城芸術展」代表団	巨 東 梅
アメリカ	ハーバード大学美術・建築学科講師	W. コールドレイク
イギリス	カンパウェル大学保存研究所	G. V. ロビンズ
イギリス	マン島博物館公文書記録保管所管理者	R. グレイグ
中華人民共和国	中国敦煌展覽代表団	呂 濟 民
中華人民共和国	中国文化部官員代表団	魏 中 珂
中華人民共和国	中国文化部官員代表団	刑 秉 順
中華人民共和国	中国文化部官員代表団	張 明 華
中華人民共和国	中国文化部官員代表団	彭 卿 云
中華人民共和国	中国文化部官員代表団	石 水 菁
オーストラリア	美術工芸化学博物館	L. F. コリンズ
中華人民共和国	清華大学	楊 根 敬
中華人民共和国	敦煌研究院院長	段 文 傑
フランス	織維歴史博物館	P. モリナロリ
大韓民国	文化財企画官	鄭 在 鍾
大韓民国	文化財研究所学芸研究官	趙 由 典
アメリカ	ニューヨーク近代美術館	A. キング

事業

国名	所 属	氏 名
アメリカ	メトロポリタン美術館	B. フィスク
中華人民共和国	新疆ウイグル自治区文化副庁長	柴 桂 銘
中華人民共和国	新疆ウイグル自治区文化庁文物所副 所長助理研究員	韓 翔
中華人民共和国	新疆ウイグル自治区文化庁	王 経 奎
中華人民共和国	新疆ウイグル自治区博物館館長	沙 比 提
フランス	京都大学大学院博士後期課程	C. ガリアン
中 華 民 国	故宫博物院	謝 金 鸞

(3) 招へい研究員

昭和53年度より招へい研究員の制度が設けられ、本年度は国外3名、国内2名の研究員に研究が委嘱され、下記のように共同研究が行われた。

1) エドワード・ブイ・セイアー(スミソニアン研究所・博物館保存センター・保存分析研究室物理研究員)

共同研究課題 中国古銅器の自然科学的研究

研究代表者 保存科学部長 江本 義理

委 嘱 期 間 61年3月1日～3月22日

2) 張 慶浩(大韓民国文化財研究所美術工芸研究室長)

共同研究課題 文化財保存事業の日韓比較研究

研究代表者 所長 伊藤 延男

委 嘱 期 間 61年1月20日～2月4日

3) 鄭 永鎬(大韓民国檀国大学校教授)

共同研究課題 日本における7～8世紀の仏像と韓国における仏像との比較研究

研究代表者 美術部長 柳澤 孝

委 嘱 期 間 61年2月10日～2月15日

4) 百橋 明穂(神戸大学文学部助教授)

共同研究課題 平安仏画の代表的作品に関する共同研究

研究代表者 美術部長 柳澤 孝

委 嘱 期 間 61年2月3日～2月17日

5) 浅田 栄一(豊橋技術科大学工学部教授)

共同研究課題 非破壊的方法による彩色顔料の分析に関する研究

研究代表者 保存科学部長 江本 義理

委 嘱 期 間 61年3月10日～3月30日

V. 研究施設・設備

1. 蔵 書

美術関係図書

日本・東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全般にわたる研究書を中心に，関連図書，各種叢書，辞典類など漢書(37,949)，洋書(3,997)，計41,944冊のほか，各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書，美術関係雑誌，紀要類，売立目録，展覧会目録などを所蔵し，所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸，その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書7,705冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究旅と伝説などの雑誌，それに声明本・謡本・囃子手付本九本・などの台本・譜本も収集している。

保存科学・修復技術関係図書

古来の伝統的生産及び工芸技術書，技術史，又は数少ないそれらの科学的究明を試みたもの，修理工事報告書及び化学・物理学・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて2,580冊を所蔵している。

本年度における収書数と総計は次表のとおりである。

区 分	美術関係		芸能関係		保存科学・修復技術関係		計
	和漢書	洋書	和漢書	洋書	和漢書	洋書	
60年度	301冊	6冊	299冊	4冊	56冊	40冊	706冊
総数	37,947冊	3,997冊	7,633冊	72冊	1,572冊	1,008冊	52,229冊

2. 資 料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をもおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書蹟、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード・録音テープ・写真(8ミリ・16ミリシネを含む)等による芸能資料を数多くそなえている。レコードには、毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レコード	録 音 テ ー プ		シ ネ フィ ル ム		ビ デ オ テ ー プ
		従来方式	P C M方式	3 mm	16mm	
昭和60年度	35枚	27本	0本	0本	0本	32本
計	7,061 "	2,617 "	82 "	198 "	4 "	167 "

研究施設・設備

3. 機器・設備

プラズマ発光分光分析装置(I.C.P.)

アルゴンのプラズマ中で発光する試料中の構成元素を分析波長順に ppb から 1000 ppm の広い濃度レンジで連続的に定量分析ができる装置である。従来、文化財の材質、組成について分析化学的情報に欠けていたが、本装置の導入によって微量分析が容易となり保存科学に関する研究面の応用が期待される。既に10種類程度の金属元素について同時定量分析を試み好結果をえている。

4. 黒田記念室

黒田記念室は、本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であって、黒田清輝の油絵・素描・写生帳等を収蔵している。

創立当時主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帳等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「知・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」等である。

5. 閲覧室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は、主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。年間の閲覧者数は、約400名である。

Ⅵ. 関係法規

◎文部省組織令抄 (昭和59年 政令第227号
改正 昭60政72, 政86, 政126)

第2章 文化庁

第3節 施設等機関

(施設等機関)

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2. 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

(国立文化財研究所)

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2. 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3. 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

(研究施設の指定)

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則抄 (昭和22年 文部省令第2号
最終改正 昭60文令5, 文令14, 文令28)

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

(名称及び位置)

関係法規

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

(所 長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2. 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の五部を置く。

- (1) 美 術 部
- (2) 芸 能 部
- (3) 保存科学部
- (4) 修復技術部
- (5) 情報資料部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- (1) 職員の人事に関する事務を処理すること。
- (2) 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- (3) 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- (4) 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- (5) 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- (6) 庁内の取締りに関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

2. 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

3. 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第 121 条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2. 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
3. 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
4. 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(保存科学部の三室及び事務)

第 122 条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2. 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
3. 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
4. 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(修復技術部の三室及び事務)

第 122 条の 2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2. 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第四項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
3. 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
4. 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

関係法規

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2. 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く。)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行なう。
3. 写真資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行なう。

東京国立文化財研究所要覧（昭和60年度）

昭和62年 1 月31日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区上野公園13-27

電話（823）2241（代）
